

039479-000-0

特66-824

論蛮改

中田 龍吟/著

M30.12

BDA-0031





非藩閥は陳腐なる題目なり、特に此陳腐なる題目を擇て「政變論」を作る

人或は著者の迂愚を笑はん、然れども、改革未だ成らず、新政未だ興ら

ずして、而して人心早く既に頹廢し、閥族を打つ可き手を以て、翻て

之を扶けんとする者概ね皆是れなるの事實を見るに於ては、此題目に新

たなる血液を注ぎ新たなる生命を興へて、以て一代の意氣を振作するは

文明進歩の途に無比の急務なりと言はざる可からず、一篇の文字、實に

唯此感想に成れりと雖も、議論の平凡にして文章の拙劣なる、著者は到

底迂愚の譏を甘受せざる可からざるか、

一篇の文字、或黨派の意見を代表したるものにあらず、又世の所謂志士





論客等の地位を冒かして立言したるものにあらず、何等の肩書をも有せず、又有するをも好まざる一平民が、平生交友と爐邊に縦談する所のものを把て、直に之を筆にせしのみ、其澹泊無味なるは著者自ら之れを知る、

「時勢人心」は著者が曾て東京又は地方に於て公けにせし諸篇を蒐集せしもの、時事に適切ならざるものあるも、之を故紙埋裡に葬るに忍びずして之を附掲したるなり、

「日本前途の危機」と題する一篇は、未完了の文字なり、交友多くは論旨の迂濶を嘲けるも、著者は未だ開悟する能はず、近く更に此論旨を擴張して、一著書として出版せんことを思ふ、

「時弊」は今秋「新政論」と題して新聞紙に掲げしもの、之れを「時勢人心」の中に置く可きなれども、相干繫する所あるを以て直に「政變論」の後に掲ぐ、

明治卅年十一月廿九日急霰書窓を打つの時

龍吟生



# 政 變 論

緒 言

革命には犠牲なかる可からず || 二三種族の犠牲 || 一平民と  
して亦黙過する能はず || 維新革命の眞意思、大目的 || 上下  
融合天衣無縫の妙趣 || 陸奥宗光の日本人論 || 人心の落日退  
潮 || 腐肉相攀ち朽骨相軋る || 堪む難き苦痛 || 非一世の必  
要 || 東洋の形勢 || 四面皆危機 || 首腦的機關の大疾病 ||  
急進的破壊主義

政 變 論

(一)



(二)

盤梯山破裂の前年なりしと覺ゆ、亡友鈴木善泣と相携へて、學暇東京より會津に遊ぶ、若松城址を落暉に訪ひ、白虎隊戰死の遺跡を月夜に吊ぶ風物凄其、亡國の感胸に滿つ、既にして猪苗代に到り、月明の下舟を湖心に浮べて、古今を談論す、善泣曰く、革命には犠牲なかる可からず、會津の如きは、維新革命の犠牲として、最も慘酷なる運命に會せしもの私情よりすれば、哀しむ可からざるにあらざるも、革命によりて、武門專權の社會を變じて、人民同等の天下と爲したりとせば、會津の如き犠牲百千を費すも意とするに足らず、然れども維新の名ありて其實未だ全く擧らざるに、藩閥の種族政權を壟斷して、亦之に乗じて社會の名利、權勢を占領し、飽まで人民を劣等人種とし視て、第二の徳川氏たらんとする状態に至りては、歴史は如何に會津の滅亡を紀す可きか、會津は維新革命の犠牲として亡びたるにあらす、二三種族の野心に斃れたる者なり

りきと傳へざるを得ざらん、君以て如何と爲すかと、

善泣が其有爲の才器と其極端なる平民主義とを齎らして長逝せしより今に數年、然れども其言は尙は耳に在り、而して願みて時勢人心如何と問へば、我等の學ぶ所、我等の信する所に照らして、日に益す非なるものと如し、我等は世の所謂慷慨家を學ぶ者にあらす、世の所謂政論家を以て自ら任せんとする者にもあらす、無名の年少、立言以て一世を警醒するの力ある者にあらす、我等は獨立自治の一平民たる外には、殆ど何等の企圖をも有せざる者なり、然れども、今日の時勢人心は、温和なる一平民として、亦默視する能はざるものあるにあらすや、  
 維新革命の眞意思、大目的如何と問へ、何人と雖、武門の特權を政治上社會上に破壊して、人民同等の實を現はすに在りしと答へざる可からざるにあらすや、人心を階級制度の重壓より解放して、自由自在縦横上下

(三)



(四)

に天眞を煥發せしむるに在りしと答へざる可からざるにわらずや、人智  
 民徳の圓滿なる發達を期して、民權の完全なる活動を求め、民權の完全  
 なる活動より生ずる勢力を基礎として、此基礎の上に國權の擴張を致さ  
 んと欲するに在りしと答へざる可からざるにわらずや、上には皇室ある  
 のみ、下には人民あるのみ、皇室と人民と密接して、其間に一の階級を  
 設けず一の特權を容れず、君心の極致は民心と一致し、民心の極致は君  
 心と一致し、上下融合渾然として天衣無縫の妙趣ある處に立て、以て日  
 本人及日本國の天職を世界に行はんとするに在りしと答へざる可からざ  
 るにわらずや、我等は之を進歩の活氣充溢せる創業諸豪傑の精神と、其  
 邦家經營の事蹟とに徴して之を証明するを得、我等は之を新日本史の源  
 泉なりと信じ、政治上、社會上諸般の改革、進歩は皆な之より奔流した  
 るものなるを信ず、明治七年に於て、陸奥宗光は何と論せしが、曰く日

本人とは何ぞ、西南は薩摩琉球より、東北は蝦夷樺太に抵るの間に生長  
 して、總て此帝國政府に管轄せらるゝ者皆此稱あり、既に此稱あるとき  
 は、各人其貧富、強弱、尊卑、賢愚に拘はらず、皆國に對して盡す可き  
 の義務と行ふ可きの權利あるは論を待たざるなりと、又曰く、日本人は  
 總掛にて此國の安全を分護し、此國の災害を分救し、此國の幸福を分享  
 し、此國の危難を分任するの理あれば、凡う日本人の稱あるものは、一  
 日片時も此數件を忘る可からず、是れ即ち所謂成國の大基にして、邦家  
 の因て以て特立する所以のものなりと、是れ實に維新の眞意思、大目的  
 に感觸して發したるものにして、陸奥の此言を爲したるは、當時漸く社  
 會、人心を威壓せんとするに至れる藩閥的勢力に反抗せんが爲めなりし  
 も、薩長の諸先輩も亦唯此精神を以て、大膽活潑萬事に處したればこそ  
 能く内外多事多難の間を勇進して、兎に角に新時代の新面目を開き得た

(五)



(六)

りしなれ、倒幕の主動者たり、革命の成功者たる豪傑等にして此の如く  
なりければ、此精神は一世人心の潮勢となりて、一時急湍激流塞ぐ可  
らざるの状を呈し、其間に非常の改革、進歩は成し遂られたるなりき、  
誰か圖らん、此の如くにして天下を率ゐたりし諸豪傑の末流、醜て此の  
人心の潮勢を遮ぎり、未了の改革、進歩を妨げて、維新の眞意思、大目  
的を斥け、藩閥以て政權を壟斷し、種族以て威福を弄し、人心の發達、  
民權の擴充に敵對して、深壑高壁唯自衛の策を講ずるに勞し、新思想、  
新人物を拒絶して、一步も其領域を侵されざらんと期し、維新革命あり  
てより三十年、其政治上の美果たる憲法の行はれてより十年に近き今に  
至て、尙ほ自ら悔悟する所無きのみならず、却て世道人心を殘害するの  
手段によりて、頑然一步も移らざらんと欲する者あらんとは、  
藩閥の頑冥不靈は、天性淡泊なる大和人種中に在りては、一の不可思議

(七)

と稱す可きか、然れども藩閥に反抗して起りたる政黨も墮落し、政黨の  
背後に立てる人民も亦默許するを見れば、一世人心の潮勢は早くも衰退  
して、維新の眞意思、大目的は夙に忘却せられたるに因るにあらざるや、  
試に問へ、創業の精神は何處に歸せしか、改革、進歩の活氣は如何かせ  
ると、現時の人心は殆ど應ふる所を知らざるにあらざるや、哀しむ可きは  
人心の現狀なり、我等は唯見る、日落ち潮去りて、冥色四合、風物慘愴  
諸種の政治的怪物が此巢窟を出で、荒天老地を占斷せんとするを、誰  
か之に對して墳墓の悲と、魔界の懼とを感せざる者ぞ、今日の政界は、  
實に是れ墳墓なり魔界なり、此處に我等は、創業の豪傑等の精神を失ひ  
たる薩長人士の遺骸を見る、此處に我等は、主義、本領と離れたる諸政  
黨の遺骸を見る、此處に我等は、改革の活火を銷せし多くの志士、論客  
才人、識者等の遺骸を見る、是れ尙ほ可なり、此等の殘屍が未だ分解し



(八)

て其原に還へらざるに、名利權勢の悪魔は、早くも之に乗り移りて、魔氣に依りて活動せる残屍をして紛争亂闘、腐肉相噬ち朽骨相軋らしむるに至りては、政界に人道無きや久しきなり。

此の如き時世に在りて、内治外交の失政を議するが如きは抑も未なり。現時の政界に流行せる汚濁の風氣は、文明男兒の堪ぬ難き所にして、品性卑陋なる政治的蠻族は、獨立人士の風上にも置く可からざるなり、世に苦しきは、氣品劣等なる徒輩と事を共にせざる可からざるより甚しきは無し、氣品劣等なる政客等が、國民の首領たり、人民の代表者たることは、苟も自尊自重の大義を知る者の堪ぬ得る所にあらず、我等は今の時世に對して最大の耻辱を感ず、我々は黙して此苦痛を忍ぶ能はず、我等は先づ日本人の性情よりして、當世を非とせざるを得ざるなり、我等尙は過去に貧しくして未來に富む者、黒風白雨の裡、尙は前途に大光明

(九)

を認めて、一意之に向て急進せんと欲する者、何の暇ありてか、老人の回顧的心情を學び、漫に當世を非とせんや、特に彼の何れの時代にも棲息する一種の偽善者が、常に世の澆季を口癖にして、自ら君子ふらんとするが如きは、我等の最も陋とする所なり、然りと雖も、政界に道理と云ふもの殆んど全く行はれず、人心は荒廢して、徳義、智慧の光焰共に消滅し、唯名利權勢を是れ争ふの動物的劣情のみ熾にして、諸般の政治的蠻民朝野に跋扈し、憲政の名に於て非憲政の實を行ふ政府あり、民權を商品視して其賣買を専業とする議院あり、國家を我物顔して、死ぬ迄政權に嚙り着かんとする藩閥あり、人民を裏切して藩閥と私通する政黨あり、國事探偵を本業とする志士あり、賄賂行使の周旋者たる識者あり、正不正の裁決は、利不利の計算によりて打消され、主義、本領の畛域は沒道理の調和と無意義の不調和との爲に紊亂され、一世を統率する大思



(〇一)

想空に歸して、國民を誘導するの大運動絶へ果て、改革、進歩の活氣、機能廢頽して、第一維新の眞意意、大目的の、中道に挫折したるを目撃するに至りては、平穩なる我等の神經も激動せざるを得ず、平民の間に平民的風趣を味ひ、靜に天然と人とを樂まんとする一布衣の徒も亦敢て一世を非として奮闘せざるを得ざるなり。

今の時は何の時か、世界の人智日に新にして、優存劣滅の勢亦益す烈しく、國家的、人種的、個人的、諸種競争の活氣は、サイクロンの如く東洋に殺到す、機變實に揣る可からざるものあり、支那の前途を何とか観る、朝鮮の現状を如何か云ふ、堂々たる日本帝國、特に一戰隣邦に勝ちたるの日本帝國は、支那、朝鮮の老邦弱國と同日に論ず可からずと云ふ者あるか、是れ浮誇の徒のみ是れ阿世の輩のみ、此の如きの徒輩社會の過半數を占むれば、帝國は其時を以て滅亡に傾くと覺悟せざる可から

ず、帝國如何に堂々たりと雖も、豈に獨り此等競争の動力を受けざるを得んや、知るや無きや、日本は一躍して世界の日本となりたりと歡呼せしと同時に、世界の猜忌心、嫉妬心は雲の如くに日本の頭上に集り來り冥々濛々容易に拂ふ可からざるの間に、意外に閃電轟雷を喰はして、我を打ち懲らし呉れんと、時機を計りつゝある者無きにあらざるを、國家の太平無事とは、現時の電鐵世界に於ては、ホンの形容詞に過ぎず、如何の強國と雖、一二の危機を踏みつゝあること事實なるが故に、多難驚くに足らず多事寧る喜ぶ可しと雖も、特別の事情によりて、今日の日本は多くの危機に逢着せるなり、日本の四面皆な危機なりと云ふも不可ならず、高麗半島に於て露國と衝突し、布哇に於て第一の親友なりし米國と衝突し、唇齒の關係ある支那を敵と爲し、露、佛、獨三國の同盟干涉に逢ひたるが如きは、尋常一様の事意とするに足らずとするも、他年一

(一一)



(二一)

日、世界の雄邦強族が、其東歐に於ける抗爭を終り、其亞非利加に於ける運動を了し、一意専心東方亞細亞の分割に従事し、清韓諸國の山河、又蒙古人種の有にあらざらんとするに至らば、日本は意外の邊に絶大な危機を見出して、必ず九死の地に陥ることある可く、而して其の變動非常に猛烈なる可きは、我等之を東洋の現勢と、列國の意向とに徴して、其必ず然る可きを信ず、是れ實に建國以來未曾有の境遇にして、此境遇に打勝て威を宇内に振はんか、或は一跌起つ能はざるに至る可きか、固より未だ知る可からざるの秋、顧みれば、國家治動の首腦たる政治的機關は、形式にはサムシングなるも實用には殆どナッシングなり、之を運轉するものは、人民の智力、權力、徳力にあらざして、頑冥不靈なる政治的蠻族なり、今や大小無數の政治的蠻族は朝野に充滿して、兇暴制す可からざるの勢あり、何事を擱きても先づ、人民の智力、徳力、權力を

(三一)

暢達擴大せざる可からざるの急務を蔑視して、却て人民に強ゆるに重大なる國家的負擔を以てせんとす、是れ人の食を奪て其力を用ゐんとするの殘虐なり、是れ貧血病者の血を絞らんとするの狂暴なり、正邪本末の顛倒實に之より甚しきは無し、現時の日本は首腦の機能に於て大疾病を有する者なり、當代の帝國は神經の中樞に於て大苦痛を感ずる者なり、一世人心の墮落壞乱して收拾す可からざらんとするも、亦當然の流弊なるのみ、此の如きの内患を抱て、彼の如きの外勢に當らざる可からず、邦家民人の運命亦ただ危ふからずや、人心、時勢夫れ此の如し、機や危ふし、時や急なり、之を救済するの策自ら急進的ならざる可からず、急進的ならずんば、大事遂に去て又奈何とも爲す可からざらん、之を醫治するの法、必ずや破壊的ならざるを得ず、破壊的ならずんば、人心を腐蝕せる邪氣を一掃す可からず、急進的



(四一)

破壊主義、是れ我等が、掲げて以て一世と闘はんとするの旗幟なり、是れ我等が、據りて以て政治上の大革新を行はんとするの方針なり、

政治的蠻族の跋扈 (其二)

人の形体悪魔の血液 || 憲政の日光空氣 || 政治的蠻族の定義  
|| 諸元老死せずんば天下平かならず || 血を流して天下を取  
るはヤボの骨頂 || 慶應義塾と官軍、北里博士と大島將軍 ||  
創業諸豪傑の無邪氣淡泊 || 二代目の横着 || ユーゴの章魚  
|| 市川團十郎富貴樓お倉 || 一大害虫 || 人才を襲ふ怪物  
|| 馬場辰猪の生涯 || 諸種の壓制中最も恐る可き壓制 || 輕  
薄才子繁殖の理由 || 畸形の發達 || 階級制度の復活 || 忠愛  
の至情を齟齬せんとす || 近衛公の貴族論 || 大反動は必ず起

る可し || 政權狂 || 藩閥の患害は政治上のみに止まらず ||

武人政治か富豪政治か || 憲政の大危機 || 彈劾

今の日本には、政府無し、議院無し、政黨無し、政治家無し、政論家無  
し、志士無し、人民無し、政治思想無し、是れ無きにあらず、第一維新  
の眞意思、大目的に順應して、憲政の精華を煥發するに足るの政府、議  
院、政黨、政治家、政論家、志士、人民、政治思想是れ無き也、

憲政とは、政權運用の法式を規定せる政治の謂ひのみ、法式如何に完全  
なりと雖も、唯これのみに由りて、憲政は善美なりと速断す可からず、  
人体の神経系統、脈管組織等は、動物中最も精巧なるものなりと雖も、  
之に供給するに清淨なる血液を以てするにあらずんば、毫も其妙用を作  
すを得可からず、豈に唯然るのみならんや、若し人体に注入するに悪魔  
の血を以てせば、人体は變化して魔体となり、其最も精巧なる神経系統

(五一)



脈管組織等は、適宜以て最も精巧なる魔的作用を生ずるの機關となり、憲政亦實に之に類す、政權を運用するの人其宜しきを得ずんば、其法式の完全なる丈うれ丈、惡政も亦完全に行はるゝならん、政体の組織的なる丈うれ丈、弊害も亦組織的に發するならん、人の智慧と徳義とは憲政の日光と空氣なり、苟も此日光と空氣とを欠かんか、憲政は到底發達するを得ず、其極遂に腐化毒變して、其邦家を傷け民人を害するの周到普及なる、恐らくは他種の政体中に其比類を見る能はざるに至らん、國人は自負して曰く、我に東洋無二の憲政あり、以て國利を増し民福を加ふ可しと、悲哉、憲政の法式を見て運用を見ず、其形骸を知りて精神を知らず、虚器空名を擁して、唯外觀の華麗を憐び、漫に制度の整備を賀し、毫も實地の利害得失如何を顧みざるなり、見ずや、憲政の活素生氣たる國人の智徳毫も政治上に暢達せずして、人心早く既に墜落廢類し、政界

晦冥、諸般の政治的蠻族は、朝野に割據して、憲政の基礎を壞ち、其柱梁を倒さんと欲しつゝあり、此勢にして止まずんば、憲政以て國を亡ぼさんとするの大危険あるを、政治的蠻族なる者は、其心胸に政治上の理想と感激とを有せずして、唯權勢爭奪の動物的慾情のみ熾なる徒輩なり、理想無し、故に窮迫行藏の如何によりて變せざる底の大本領に於て、以て國是を計り國人を率ゆる能はず、感激無し、故に慨然躬を以て社稷に許し、成敗得失を問はずして邁往するが如き活火無し、唯權勢爭奪の動物的慾情のみ熾なり、故に強者は兇暴、常に勢を以て人を壓せんと欲し、正義以て其無耻の心情を律す可からず、怯者は陰險、能く權策を放て、他を離間、中傷、陥罪せんと欲し、人情以て其醜汚の胸懷を照らす可からず、優者は驕傲、劣者は卑屈、凡る此の如き者、即ち謂ふ所の政治的蠻族なり、今や、此等の



(八一)

蠻族は朝野に繁殖し、政界全く其占領する所となりて、多少蠻族的氣習を帶ぶる者にわらずんば、政界に入るを許されざる程となれり、然り而して、此等蠻族の酋長たるは、世の所謂藩閥の諸元老なる者に外ならず我等は現内閣成立の當時論じて曰く、

厄介なるは、政治上の主義、定見など云ふものは爪の垢程も有せざるに引き換え、獨り政權を専らにせんと欲するの野心のみは未だ全く衰へず、他人の全盛を見る時は、年にも耻ぢずヤキモチ沙汰に出で、滑つた轉んだの騷動を起し、私情、私欲、私憤の爲に、敢て内閣の活動を妨害し、甚しきは其命脈を殄滅して、以て自ら得たりと爲すの諸元老なり、

諸元老死せずんば天下永く平かならず、諸元老死せずんば政界の革新得て期す可からず、諸元老死せずんば政黨の勢力容易に伸張せず、諸元

(九一)

老死せずんば憲政の精神彰々なり難し、憲政の極致は、上下一体君臣同心、君の思ふ所は輿論と一致し、輿論の望む所は君の欲する所と符合して、毫末も相戻ること無きの邊に在り、是れ此妙趣や、上下君臣直接密着して、相互の思想、感情は、自由自在に疏通混和し、終に相同化するにわらずんば、得て見る可からざるものたり、然るに我國に於ては、上下君臣の間に、別に諸元老なる者の一種族介在し、藩閥の權勢に據り、功名の威望を恃み、郎黨を養ひ、輿類を率ゐ、飽々でも天下の政權を専らにせんと欲して、奸計陰謀殆ど至らざる所無きが故に、憲政ありと雖も、君臣一致の妙趣を見る能はず、政黨ありと雖も政黨内閣の制度は行はれず、政局の變動、内閣の更迭等頻繁ならざるにわらずして、而かも政界の風氣毫も革新する所無き所以のものは、實に天下の政權今尙ほ此一種族の掌裡に在りて、大小百千の政變は、



(〇二)

多くは此一種族の間より起り來るの波瀾なるに過ぎずして、政黨の馳驅、輿論の活動等より生ずるの政變殆ど是れ無きが爲めなるのみ、血を流して天下を取るが如きは、天下を取るの窮策にして、達人より觀ればヤボの骨頂、唯一笑の外なかる可し、例せば明治元年上野の戦争眞最中に、同じ江戸の慶應義塾社中には、西洋經濟書の講究に余念無く俗界の騒動には無頓着なりしと云ふ、當時殺人場裡に勇戦して幸にして勝て官軍たる軍人等と、講堂の裡靜に世界文明の移植に苦心せし書生仲間と、其邦家人人に致せし功勞、孰れか大孰れか小、容易に判定す可からず、又近く日清戦争の時、大島將軍は孤軍を提げて牙山に支那の大兵を破りしが、同年北里博士は香港に黒死病を探りて其病原を發見したりき、將軍と博士との勳功、孰れか優孰れか劣、是亦輕しく裁決するを得ず、然れども、俗界の榮譽とする所は、識者の榮譽とする所とは迥然相

(一ニ)

異なれり、俗界に於ては、殺人流血の戦争より大なる事業は無く、此戦争に勝ちたる者よりエラキ人物は無し、戦勝者にあらずんば、英雄豪傑として俗界に崇拜せられず、征服者にあらずんば、俗界の權勢を専らにするを得ず、是れ歴史と人情との証明する所、古今に亘りて變らざるの事實なり、薩長の人物等は、討幕の一擧に於て征服者なり、維新の大業に於て戦勝者なり、彼等が壯士、浪人より一躍して、天下の政權を左右するの英雄豪傑となりたるも怪しむに足らず、彼等は多少に拘はらず、人を殺し血を流して其事業を建てたる者なり、唯此一事以て俗界の人心を眩惑して奴隸の氣風を生せしむるに足る、彼等何を欲して成らざらん、彼等が日本の土地を分割して、各自ら大名となるも隨意なりしならん、其然らざりしは、寧ろ一の奇蹟と云ふ可きなり、戦勝者、征服者にして維新諸豪傑の如く無慾、無邪氣なりし者は、支那又は西洋諸國の歴



(二二)

史には多く見當らず、畢竟諸豪傑が、開國の急潮に乗じ、世界の活勢に感じ、維新革命の眞意思、大目的を遂げんが爲に、私情私心を一擲して顧みざりしものにして、其豪懷火の如くにして、而かも一味水よりも澹泊なるの性情を存じ、英雄の機略に兼ねるに嬰兒の無心を以てするに至りては、大和人種の天真を發露して實に言ふ可からざるの妙趣あり、我等が西郷、大久保、木戸其他の諸豪傑を偉なりとして、當さに百代に傳ふ可しと爲す所以のものは、唯其功業の大なるが爲めのみにあらず、其性情の高潔なる風致、以て世道人心を感化するに足りて、後の政治家等の靈符と爲す可しと信ずるを以てなり、我等は既に戦勝者、征服者の俗界に對する權利を知る、故に藩閥政府の起れるを怪しまず、血を流し人を殺すこる最も多かりし薩長人士の特に勢力あるを怪しまず、然りと雖も、維新革命より三十年の今日、社會的進化の最も急激なりし三十年を

(三二)

經たる今日、憲法政治の既に施行せられたる今日、尙ほ藩閥政府の蠢然として屹立するを怪しむ、尙ほ薩長人士の政界に跋扈するを怪しむ、創業の當時には改革の原動力たりし藩閥政府が、次第に變性して遂に改革の勁敵たるに至れるを最も怪しむ、戦勝者、征服者の首領たりし西郷、大久保、木戸等の諸豪傑は、意外に眞面目に素直にして、一意唯國事に盡瘁せしに、僥倖にも其驥尾に附して立身出生せし凡庸の人士、言はい居ながら親父が汗血に成りし身代を相續せる二代目同様の徒輩は、意外に執拗、横着、傲慢、兇暴にして、飽迄も天下を我物視せんとするを最も怪しむ、胸襟快活彼が如き創業諸大人の末流、却て此の如き政治的蠻族を生ずるに至りたるを見て、其因果の不可思議なるに驚歎せざるを得ず、聞道らく、遺傳的惡病は、代を隔てて發現することありと、戦勝者征服者の毒威凶權が、創業諸先輩の時代に現はれずして、却て其末流に



(四二)

至りて猖獗なる所以のもの、豈に二代目以下人物等の性情下劣なるに乗じて、潰裂四出又救済す可からざるに至りしものにあらずや、不幸なる時世よ、非運なる國民よ、汝等は此の如き政治的蠻族の巨魁等を仰ぎて、其首領として尊び儀標として敬ひ誘導者として頼まざる可からざるに至りて、汝等も亦此等蠻族の醜風汚氣に感染して、墜落其極に達せんとせり、無識見なる時世よ、無氣力なる國民よ、汝等は此等の蠻魁の政治上に跋扈するを見て、起て之を驅攘する能はず、其虚飾的制度に惑はされ、其讓歩的態度に欺かれて敢て手應へある反抗を試みざりしが故に、今や彼等の巢窟は牢として抜く可からざるに至りたり、彼等が自ら其巢窟を固むるの方法を見ずや、彼等はユーゴーが之によりて悪魔あるを推知するに足ると言ひし章魚に似たり、彼等の怪肢は社會の八方に向て張られ、而して何れの怪肢も固有の吸盤によりて社會の名利、權

(五二)

勢を吸収しつゝあるなり、彼等の利益線は北海道の北より臺灣の南迄連亘せり、昨の北海道、今の臺灣、ア、既に何事が行はれたりしか、現に何事が行はれつゝあるか、陸奥南部の原野を知る者は少なかる可し、而して彼等が早くも此原野に手を着けたるを知る者は更に少なかる可し、山野、森林、河海、産物の在る處、景勝に富む處、利の收む可き處、彼等の影を見ざるは無し、天下の富める者は、高利貸の親方、相場師の隊長に至る迄、多く彼等と氣脈を通じ、俗界の權勢を視ること塵芥の如くなる可き法主も、謹で其保護を仰ぎ、至高の學堂は、其屬僚の養成所たる奇觀を足し、唯眞理を崇拜す可き碩儒、博士も、彼等の前には奴隸の如し、市川團十郎は、彼等の引立によりて梨園に覇權を揮ひ、富貴樓のお倉は、彼等のお蔭を蒙りて交際社會の女王となる、政府部内同類の株連蔓延を怪しむ勿れ、非藩閥の爲に起れる諸政黨が、何時の間にか變



(六二)

性して蠻魁の爪牙となれを怪しむ勿れ、蠻氣漠々政界を罩め溢れて一般社會に及びて、一代の名利、權勢を横領せずんば止まざらんとするの秋人心壞乱、風俗頹廢して、汚事、怪事、慘事の盛に行はるゝを怪しむ勿れ、一大害虫は我社會の心腹に蟠まりて、其養液を吸取し、其活素を奪食しつゝあり、社會の容体尋常ならずして、一種言ふ可からざるの鬱悶を感ずるは實に之が爲めなり、

少壯氣銳の徒、有爲の才器を抱て社會に立ち、漸く勢力を得るに至るや早晩必ず其前途を遮斷するの一大怪物を見る、怪物は路を遮りて曰く汝は我意思に従はざる可からず、我同類たらざる可からず、我爪牙たらざる可からず、應と言はい汝は名利を得ん、否と言はい此上一步も進むを許さずと、此威喝に會するや、獨立特行の意氣あり、自尊自重の心性を有する者は、勃然男らしき怒を發して、敢て怪物と闘はんと欲す、然

(七二)

れども強弱の勢相敵せずして、多くは怪物の迫害する所となるを免れず之が爲に或者は中道に蹉跌し、或者は逆境に零落し、或者は獄裡に憤死し、或は他邦流寓の間に客死し、或者は自殺したり、日本のコストたる馬場辰猪の生涯の如きは、實に此怪物と氣慨あり才識ある少壯者との争闘史なりと云ふべし、此の如きは獨り政界に於てのみ然るにあらず、實業界の如きは政界と相並び特に其甚しきを見る、學問、宗教等諸界に於ても亦同一の事實を見る、社會各部の裏面を探れば、直接又は間接に此怪物の權勢に突き當らざるは無し、時の古今、國の東西を論せず、社會の名利、權勢を壟斷占領したる者にして、此の如くに廣く行き亘り、此の如くに深く浸み込みたる實例は多からず、茲に於てか、諸種の壓制中最も忌むべく懼るべき、人の才智、氣風に對する壓制行はれ、此壓制を甘受する者にあらずんば、容易に社會に頭地を描づる能はざるの傾向



(八二)

を見るに至れり、一世の人才、多くは之が爲めに薄志弱行の徒となり、曲學阿世の輩となり、輕俊捷給にして而して自主獨立男兒の本領を備へざる才子風の小人、時を得て朝野に繁殖するに至れり、我等は大學其他の高等學校に在りて、學あり才あり而して大なる抱負あり、前途頼もしかりし人物が、何時の間にか其意氣を沮喪して、世に出で、奏任判任の官職、又は同様の地位を得れば、宿昔の大志を達したるが如き想ひを爲し、意氣揚々妻兒に誇るの状あるを見る毎に、其薄志弱行を笑ふよりも寧ろ此等の人物を軟化する時世の風潮を悲ますんばあらず、蓋し今日の社會に在りて、容易に功名を成さんと欲せば、男兒の意氣を擲て、一も二も無く社會榮譽の中心たる蠻魁等に取り入るに在り、大才あるものは大用せられ小才ある者小用せられ、概ね其希望を達せざるは無し、苟も然らずんば、一時逆境に立つを覺悟せざる可からず、逆境に立て屈せず

(九二)

自力自活、内に心身の鍛錬に怠らず、外に新時代の開拓に努むるが如きは、豪傑の士にして始めて能くす可し、才學ある者必ずしも豪傑の士にあらず、赤門の書生が、十年苦學の途に學士の稱號を得て後、更に二三年の運動を費して、辛ふじて官途に就き得て、始めてホット一息するが如き風習を生せるも、亦何ぞ異とするに足らん、聞道らく、近時實業の勃興に乗じて、俊才の書生等之れに入らんと欲するの風潮ありと、是れ賀す可きの現象なり、然れども、彼等が簿書埋裡に蠅覬たるの時期を經過して、進で大に手段を揮ふ可きの時期に至らば、例の怪物に突き當りて、狼狽することあるや疑ふ可からず、何の方面よりするも、一たびは彼の怪物の妨害を受けざる可からざるは時世の實況なり、此の如くにして、人心の發達、活動を求むるも、獲る所る結果は、畸形の發達不具の活動に過ぎざるのみ、教育事業の失敗して、人心の墮落を防ぐ能はざる



(〇三)

は、獨り當路者の罪のみにあらずして、時世の罪實に最も多きに居る、更に見ずや、四民同等の精神は全く滅没して、同等なる可き臣民の間に貴族の一階級發生したるを、新舊兩華族は、諸種の保護的制度と便宜的事情との下に、俄に其數を増し其勢を加へ、獨り社會の榮譽、權勢を壘斷せんとするのみならず、萬民の心胸を一貫せる、忠君愛國の心情迄も專有せんとの妄想を抱くに至れり、貴族は自ら誇りて曰く、貴族は皇室の藩屏、臣民の精華なりと、貴族も亦皇室の藩屏なる可し、然れども藩屏として最も微弱なるものたるは事實の明証する所なり、皇室の金城鐵壁として、千古不拔の偉力あるものは、忠君愛國の赤誠常に胸裡に燃えつゝある、四千萬の庶民を措て他に之を求む可からず、我皇室は建國以來此金城鐵壁に據らせ玉ひて、天日と同じく耀き玉ふ、貴族獨り皇室の藩屏たりと云ふが如きは、我國体の神髓を知らず、大和民族の情性を解

(一三)

せざるのみならず、庶民の赤誠を侮辱するの蠻類に外ならず、日清戦争の時に當りて、茅屋の賤民は高潔神の如き的心情を發露せり、此の如き庶民を有するの帝國が、連戦連勝威名を世界に轟かせるも亦怪しむに足らず、此の大事に臨みて平生飽食暖衣する貴族社會は、如何の精神を發現したりしか、其冷淡浮薄なる態度は、識者の彈劾を免る能はざりしにあらずや、世論の刺衝を受けて、始めて軍隊慰問使を戦地に遣はしたる始末なりしにあらずや、此の如くにして、貴族獨り皇室の藩屏なりと誇るも、人誰か之を信せんや、貴族も亦臣民の精華なる可し、然れども、臣民の精華たる者は、唯爵位動名のみ高貴なる者と同じからず、無爵、無位、無名の一平民なりと雖も、智徳、功業世に秀で、一代の儀標たる人物ころ、眞箇臣民の精華なれ、此の如き人物は、今の貴族社會に少くして、却て我等庶民の間に多きを見る、貴族獨り臣民の精華なりと云



(二三)

ふは、事實の許さざる所なり、且つ夫れ貴族の名實相副はざる者は、當世に珍しからず、敗徳、汚行、市井の賤民も敢てせざる行爲に出で、刑律に觸るゝ者も亦少なからず、其然らざる者は、倨傲自大、唯庶民を眼下に見下すのみにして、毫も社會に光彩を添ゆるの任務を成す能はず、或は奢侈淫樂、酒色に耽溺して、其流風世道人心を害するを顧みず、近衛公爵論じて曰く、

抑も日本の貴族社會に二種の病あり、一は遺傳性にして一は傳染性なり、而して兩者各反對の病狀を呈す。

遺傳性のものは因循病といひ、傳染性のものは生意氣病といふ。

又兩病ともに高慢的と卑屈的との二種あり、之を圖に示せば、

因循病 高慢的……………遺傳性 老年者に多し漸  
卑屈的……………傳染性 次衰滅の如し

生意氣病 高慢的……………傳染性 中年以下の人に多  
卑屈的……………傳染性 益猖獗を極む

此順序により、其病源病質を論じ、合せて其治療法及び、其平常の攝生法をも私見を加へて述べん

第一 高慢的因循病 此病は前述の通り遺傳性にして、維新前の封建の夢、未だ覺めざるより起る、

然れども自尊の度高に失して、他を排斥するの餘り遂に厭世的人となるなり、

第二 卑屈的因循病 是又傳染性なり、即ち深窓の裡にありて、婦人の手に長じたるより生ずるものにして、自から社會に出づるは怖ろしき様に感ずるより起るなり、

然れども此二病は、社會の變遷によりて大に其病勢を減退し、今は

(三三)



(四三)

以下將に説き起さんとする第三第四の病大に憂ふべきの時となれり  
 第三 高慢の生意氣病 これは急激なる傳染の性質を有す、尤も近時の新教育を受けたる人に發生するものにして、僅かに一兩年乃至四五年も洋行したる人に最も多しとす、通稱して「利口ガリ」と云ふ  
 第四 卑屈の生意氣病 是れ又傳染性にして、難治の症なり、世俗之を「小才子」と名く、自ら必要な時に時の權勢ある人に諂諛して「幫間」と呼ばれて自ら甘んじ、野卑の言動を學んで下情に通ずるものと誇るの類是なり、

何れも難治の病症にして殆ど其治療は難し、第一の病症の如きは到底不起の病たるに相症なきも、近來病勢減退して、別に治療法を講せずとも全滅するの期なきにあらざるべし、他の三症に至つては、將來成べく活潑にして規律嚴正なる教育を行へば輕症の中に救ふことを得べし、

し、其重症のものに至つては、天刑病者梅毒患者を見るが如く、社會にして之に伍するを慙づる迄に至らばいざ知らず、先づ治療の方法はなかるべし。

夫れ此の如し、而して貴族社會の首腦たる者は、即ち藩閥の勢力に依りて、成り上りたる新華族にして、新華族中最も威權ある者は、即ち藩閥の會長等に外ならず、藩閥の類が、社會の名利、權勢を專領せんと欲する、茲に至りて極度に達せりと言はざる可からず、我等は、福澤先生が其「學問のすゝめ」に於て、天は人の上に人を作らず人の下に人を作らずと大喝して、階級制度の大弊を打破せんと欲したるの時に當りて、無名の書生、浪人、壯士たりし者共が、却て階級制度を再興して、之によりて社會を覆歴するに至れるを見て、時勢の退歩に驚かざるを得ず、等は封建組織を一氣に打破したる創業諸豪傑の同族中、却て一種の封建

(五三)



組織を復活して、之によりて一世を推倒するに至れるを見て、人心の墮落を悲しまざるを得ず、事既に茲に至る、夫れ如何して以て第一維新の眞意思、大目的を喚起す可きか、福澤先生は曰く、大反動は必ず起る可し、必ず起らざる可からずと、我等も亦然りと信ず、然れども、何人か先づ此大反動の勢を作す可きか、筆を投じて長嘆すれば、天意髣髴我等少壯者に促がす所あるものゝ如しア、

三十年間の急風猛雨を凌ぎ來りて、尙ほ薩長閥族の中原に龍蟠虎踞するを見る、政權先制の勢に據りて更に容赦無く社會の名利、權勢を壟斷したるに因ると云ふと雖も、彼等が動物的氣力極めて豪壯にして、權勢を好むこと食色よりも甚しきにあらずんば、焉ぞ能く此の如きを得んや、邦人多くは早熟早衰、五六十歳に至れば早く既に活氣を消亡して、又俗界の功業に意無く、節を紙りて孫兒を弄する底の者比々皆な是れなるに

獨り政治的蠻魁等は此事例の外に立ち、富貴功名人生の榮華を極めて、此上の希望はなかる可しと思はるゝの境遇に立ちながら、尙ほ頑然として權勢の地位を占め、敢て一步も譲らざらんと欲し、之が爲に萬艱に當るも意とせざるの勇氣あり、是れ殆ど常識を以て度る可からざるの性情にして、止む無くんば之を政治的姪亂と呼ばざる可からず、人物新たならずして百物皆な新たならず、改革、新政の容易に行はれざるは、政治的蠻魁等の政治的姪亂に因るもの多しと云ふと雖も、其意氣の老て益す壯なるが如きは、寧ろ偉とせざる可からず、惟ふに、彼等は政權人事の一切に干渉したる封建時代に生れて、其時代の政權崇拜の氣風に涵養せられ、而して幸にして維新の風雲に際會して、躬親ら政權を左右するの地位に立ち、爾來政治の一局面に於てのみ生活し來りし者なるを以て、其智見情思全く此一局内に没溺し、政治上の權勢を措て、人間又愛好す



(八三)

可きいの權勢い無しと妄想いするに至りいしなり、政治的いの姦乱いを以て目せざる可からざる所以にして、政治以外に人生幾多尊重す可きの事業あり、一世人心を啓發、誘導、感化、救濟するに足るの力ある、科學家、文學家、教育家、宗教家、慈善家等は、其天爵の寧ろ王侯相將よりも高きものある道理を解せざる偏見陋識驚く可く、飽までも政權を專領して、甚しきは之を子孫に傳へんと欲するにあらずやと想はるゝ程に執着するも、又政權を正當の範圍内に運用せず、社會の名利、權勢をも併せ壟斷して、人の才智、氣風までも、之によりて壓制せんとするに至めたるも、皆な之が爲めなりと思へば、蠻情寧ろ憫む可からざるにあらざるも、其社會人心を蠱毒したるの大罪に對しては、決して其責を追るゝ能はず、例せば明治十四五年頃、西洋の思想は急潮の如く人心を浸し、其結果として自由主義、個人主義、民權論、進歩論等が、非常の勢を以て政海に湧き

(九三)

出でたるを見て、彼等の狼狽は一方ならず、自衛の窮策として、皇漢學を復興し、大に之を獎勵して、一時文明の發達を阻害したるが如きは、彼等の意思を探れば、唯之を以て自家の權勢を保護せんと欲したるに過ぎざるも、之によりて人心の開展を妨げて、社會の調子を狂はせたるの弊害は、幾何なるやを知る可からず、藩閥政治の患害が、唯政治上に行はるゝものと思ふは活眼無き者なり、其患害は、廣く社會の全面に及び深く人心の根底に達せるなり、萬能足て一心足らざる底の人才が、雨後の蟄の如くに當世に發生したるを見よ、誰か思半に過ぎざらん、我等の苦言痛語、一毫も借す所なからんとするは、眞に止むを得ざるに出づ、我等は過日新聞紙上に左の如く論じたりき、

曩時援韓征清の事あるや、武人の勢力は社會人心を壓して、天下當る者無きの狀ありたりき、戦後更に軍備擴張を以て邦家經營の大主眼と



爲さざる可からざるに至りて、武人の勢力はいやが上に増長してサーベルを把る手に、政權を併せ握らずんば止まざらんとするに至れり、戦争ありて武人の勢力の發動するは怪しむに足らず、然るを況や第一の戦争後に終りて、更に第二の戦争を豫期し、國人を擧げて作戦準備の陣營に起臥するが如き場合に於てをや、戦争に紹ぐに戦争を以てし國人をして戦勝武功の外他事を顧慮するの暇なからしめたるは、第一世那奈翁が、變心し易き佛蘭西民人の上に、其帝位の安全を計りし第一の秘訣なりしを知らば、戦後の日本に武人の勢力の膨大を見るも、亦毫も驚くに足らざるなり、國に有爲の爲政家あり、民に自主獨立の氣風あり、毅然憲政を擁護して、一步も外力に借さざる實勢あるに於ては、武人の勢力如何に猛烈なるも、能く之を制馭して、其止まる可き處に止まらしめ、敢て或は政界に侵入し來るを許さざるを得可しと

雖、唯悲む、朝野共に此の如きの人を欠き、此の如き力を欠き、遂に武人の跋扈を政治上に防遏する能はざるに至れるを、(中略)政治社會の綱紀壊乱して、人に恆心無く、黨に主義無く、朝に正義無く、野に實力無く、憲政は形式のみ、民權は虛名のみ、腐氣汚風一世を蓋ふて、道理の活動殆ど全く熄み、争ふ所のものは權勢、鬪ふ所のものは利益、其一勝一敗は唯藩閥を以て藩閥に更ぬ、暴を以て暴に紹ぐの影響あるに過ぎず、乾坤漠々、大改革の眞勢力何處に在るを知らず、老天荒地、第二維新の壯圖或は遂に就らざらんとす、是れ實に高島子の如き梟雄が躍起して其怪腕を政治上に揮ふ可きの秋なり、是れ實に薩長の武頑派が、幕地土を捲て政界に現はれ來る可きの時期なり、是れ實に佐々友房、頭山滿、大井憲太郎等の政治的野武士が、盛に斬取強奪を行ふ可きの舞臺なり、是に實に黄金以て議院を腐らし、術策以て



反對黨を破壊し誑詐以て民人を籠絡して、以て自家の權勢を樹立せんとする者が、内閣の乗取りを企つ可き最好の場合也、

政界現時、衆心を支配する者は金力と權力となり、苟も金力と權力とを有して、而して之を政界に向て發揮せんか、平沼專藏の徒と雖も、尙ほ能く一朝夕の間に、二十三十の代議士をして其黨與たらしむるを得ん、然るを況や、薩長の武頑派に於てをや、見ずや樺山伯高島子等が、一たび手を動かせば四五十の政治家は、忽ちにして政府黨となり二たび手を動かせば公同會の如き者、容易に起り來れるを、又見ずや大隈伯一人内閣に入り、五六の黨員官職を得れば、堂々たる進歩黨、日本に於て、最も人才あり識見あり氣節あるの政黨なりと自稱する進歩黨が直に軟化して薩摩藩閥の辯護者たるに至れるを、今の諸政黨を動かすは、人形を操るよりも易く、今の政界を搔き廻はすは、朽木を

折るよりも難からず、薩長の武頑派にして、權略術策を以て生命となせる、高島子其人の如き政治家を以て謀主と爲し、金力と權力とを以て利器と爲し、正奇出沒、虚實隱見、端倪す可からざるの手段を以て活動せば、能く何者か之に敵せん、人心の變動し易き今日より甚しきは無し、選舉人民は代議士を信するを得ず、代議士は黨派を信するを得ず、黨派は自ら信するを得ず、例せば明年の總選舉の如き、何の黨派をして大勝利を得、大多數を得せしむるも、人心にして此の如くんば、中央に在りて金力と權力とを有する者にして、施すに其魔術を以てせんか、其地方に於て得たる大勝利、大多數なるもの、或は夢の如く消え去るならんのみ、武頑派にして政權を占領せんと欲せば遺ちたるを拾ふが如きのみ、所謂坐して天下を取り得る者は、豈に薩長の武頑派にゆらずや、今日に在りては、薩長兩派の關係尙ほ未だ密着せず



(四四)

其羽翼尙は未だ完全ならず、其計策尙は未だ成熟せず、故に形勢尙は未だ一世を驚殺するに至らず、世間或は余輩の所説を以て夢想に類すと爲す者ある可しと雖も、現内閣の内外に充滿せる不穩の氣象によりて、以て其變動の如何を測度すれば、余輩は遠からずして、武頑的洪水の政界に氾濫するあらんことを信じ、我國人一度は軍人政治の苦味を喫せざる可からざるの境遇に陥る可きを信じ、之が爲に尙は未熟なる憲政は、非常の厄運に會して精神殆ど消亡せんとするに至り、之が爲に尙は稱弱なる民権は、意外の壓力に制せられて、活氣殆ど滅絶せんとするに至り、而して後大反動始めて起り來りて、一切の舊勢力を破壊せざれば止まざるならんことを信ずる者なり、

政變的勢力の趨嚮する所、遂に此極に達せざるを得ず、藩閥専權の流弊として、富豪政治を見ずんば、必ず武人政治を見るに至るならん、藩閥

(五四)

的勢力を維持して今日に至りたる者は、獨り其代表者等の老て益す壯なる動物の活氣のみにあらず、其自衛の策に於ける智慮の周密なる、眞に驚く可きものあり、其國政に於ける識見、技倆の迂疎に比すれば、殆ど別人の觀なきにあらず、其政府を組織する方法の如き、常に薩長の均勢を失はざらんことを努め、兩派の大臣を巧に諸省に配置するが如き、首相の位地を兩派の廻り持にするが如き、一派の首領内閣總理大臣たる時は、一派の首領は樞密院議長となるが如き、皆な兩派の均勢を保たんとするの意思に出づ、宙に然るのみにあらず、更に閣内に在る者と、閣外に在る者との均勢を失はざらんとするに至りては、其用意も亦到れりと言ふ可し、蓋し兩派の均勢を閣内に保つも、其内閣にして専横の心を生じ、永く天下の政權を私せんとするが如きあらば、閣外に在る者は、廻り持にす可き筈の舞臺を、他に専有せらるゝの虞無しとさなす、茲に於



(六四)

てか黒幕宰相なるもの起りて、常に内閣の動靜を監視し、内閣に對する  
 鼻姑の地位に立ちて、或は之を扶植し、之を推倒し、絶て人手を煩はさ  
 ず、此の如くにして、兩派は分裂することあるも、再び合す可からざる  
 程に分裂する能はず、優劣を決することあるも、復た和す可からざる迄  
 に優劣を決するに至らず、而して一旦藩閥の根本を覆へさんとするの外  
 患あるに至れば、兩派一致協力して之に當る、無數の變遷を經過して、  
 其權勢今尙は純然たるもの、這般の妙作用あるに因れり、然りと雖も、  
 由來藩閥的勢力の根本を作すものは、其武威に外ならず、薩の海軍に於  
 ける武威、長の陸軍に於ける武威は、曾て天下を震懼せしめしものにし  
 て、曩時非藩閥の氣焰萬丈、政府の四面皆敵なるの形勢ありしに際し、  
 傲然之と對峙して一步も譲らざらんぞせし勇氣は、實に其背後に頼む所  
 あるが爲に生じたるなり、此故に平常無事の日に在りては、文治以て其

(七四)

外○觀○を○飾○り○、伊○藤○侯○一○派○の○文○的○政○治○家○得○意○翺○翔○す○る○も○、一○旦○緩○急○の○變○わ  
 れ○ば○、遂○に○武○斷○の○眞○相○を○蔽○ふ○能○はず○、山○縣○、黒○田○其○他○の○武○的○政○治○家○亦○從  
 て○表○面○に○現○は○れ○來○る○、是○れ○歴○史○の○明○言○す○る○事○實○に○し○て○、近○く○は○征○清○の○一  
 舉○に○、廟○算○未○だ○定○ま○ら○ず○し○て○、戰○氣○先○づ○動○き○、戰○氣○遂○に○廟○算○を○拉○し○去○り  
 たるが如き、自由黨と提携せし伊藤内閣が武的政治家等の感情を害した  
 る余、脆くも一高島子の權略に倒れたるが如き、軍備縮少を聲言せし松  
 方伯、大隈伯等が、内閣に入ると同時に之を取消さざる可からざるに至  
 りしが如き、現内閣と結托せし進歩黨が、遂に樺山伯、高島子の勢力の  
 爲に彈ね飛ばされしが如き、皆な我等の所言を確かむる事實ならざるは  
 無し、國家内外の形勢、共に武的政治家の勃興を促がし、朝野現時の状  
 況、悉く武人政治の來るを豫言す、憲政の前途、民權の運命、亦危から  
 ずや、萬一意外の事情に因りて、武人政治の猛獸は出で來りすとすするも



國民は果して富豪政治の毒蛇に會せざるを得るか、政權と金權との結託は、今日に起りたるにあらず、然れども今日に至りて大に其力を加へ、此一大事情を度外に措ては、到底正當に現時の政勢を解釋する能はず、三菱の主人が、經濟社會を左右するの地位に立ち、更に隻を手政界に伸ばして、内閣の製造又は破壊に與りて力あるは人の知る所なり、故大久保は三菱の權勢を憂慮して、其制馭の策を施したりしに、其末流の徒は却て富豪と結託して、自ら爲にせんと欲し、憤然其患害の懼る可きを知らず、藩閥の首魁等、才智無き者は武威を怙み、武威を有せざる者は富豪の力を借り、互に相下らず、而して今や武威に據る者富豪に依る者との氣焰漸く加はり、才智ある者を壓せんとするの傾向あり、我國民にして武人政治に嚇殺せらるゝことも無く、富豪政治に俗殺せらるゝことも無く、我等の所言虚偽に終らば、誠に意外の幸福なり、

此故に、藩閥の勢力は破壊せざる可からず、政治的蠻族は彈劾せざる可からず、維新革命の名に於て彈劾せざる可からず、創業諸豪傑の名に於て彈劾せざる可からず、人民同等の名に於て彈劾せざる可からず、憲法政治の名に於て彈劾せざる可からず、人心發達の名に於て彈劾せざる可からず、自由競争の名に於て彈劾せざる可からず、新人物、新思想の名に於て彈劾せざる可からず、文明開化の名に於て彈劾せざる可からず、民權國權の名に於て彈劾せざる可からざるなり、

政治的蠻族の跋扈

(其二)

昔何ぞ盛にして今何ぞ衰へたる——政黨の勳業——政治思想の  
 教育者——板垣伯等と薩長の大勳高爵等と——政黨墮落史——  
 誕生の事情——非藩閥の俊才——官吏の向ふを張らんとす——



(〇五)

藩閥の實力を誤算す——疲憊して國會に入る——報酬主義の毒  
 弊——議員選舉請負者——代議士は代議士たり我は我たり——  
 黨派的感情——藩閥扶助の事實を懺悔せよ——選舉場裡の紀綱  
 壞亂——金腕主義全盛のバナラマ——政黨の大革命——事實は  
 評論よりも有力なり

藩閥の怪物と闘て失敗したる者は多し、然れども失敗の慘にして末路の  
 悲し可き、政黨の如き者あるか、維新の精神を活かさんが爲に、薩長の  
 天下を争ひたる者は政黨なり、國民の政治を行はんが爲に、藩閥の權勢  
 に敵したる者は政黨なり、其興るや人心の潮勢に乗じ、其動くや民權の  
 大義に由り、旗鼓堂々一世を風動して、直ちに藩閥の牙城に押し寄せた  
 る者は政黨なり、然り而して壯圖未だ成らずして活氣既に竭き、或は將  
 に土崩瓦解を免れざらんとする者概ね皆是なり、昔何ぞ盛にして今何ぞ  
 堪はんや、

(一五)

衰へたる、其志す所理に中らざるにわらず、其計る所機に投せざるにあ  
 らず、其名正しからざるにわらず、其實順ならざるにわらずして、尙ほ  
 且つ墮落頹廢今日の如きを見る、眞箇に政黨を知る者、誰か俯仰感慨に  
 堪はんや、  
 藩閥の政變等は、曾て政黨を國賊視し、今尙ほ全く往時の感情を脱する  
 能はず、長派と自由黨と提携し、薩派と進歩黨と結托して、而して遂に  
 政友の情熱を發生する能はざりしが如き、獨り其政治的系統の異なるが  
 爲めのみにあらず、實に此忌憚の感情の今に存在するに因る、之を以て  
 政治的蠻魁等の流風に従ふ者共は、素より政黨を非訛するに躊躇せざる  
 のみならず、獨立特行の識者等も多くは之を冷笑し、小心翼翼たる良民  
 が、政黨に干繫すれば、御上に對して濟まぬものゝ如く想ひし時期もあ  
 り、政黨由來世の薄待を受けたりと雖も、政黨微つせば、憲法政治の形



(二五)

式すらも見るを得可からず、藩閥の勢力は今日に十倍して、政治的蠻族の跋扈現時の比にあらざりしならん、政黨は藩閥打破に失敗せりと雖も其國民の爲にしたる功勞は没す可からず、封建制度の遺習尙人心を罩め官尊民卑の弊風一世に行はれ、四民同等の名ありて其の實未だ現はれざるの時に於て、自由、民權、獨立、自治の何ものなるかを説きて、以て素町人、士百姓の迷夢を破り、政治の原理、政体の進化、民權の發達を論じて、以て政府を國家視し官吏を主權者視したる古來の民惑を拂ひ、新鮮なる政治思想を宣傳して、社會の最下層に迄も及ぼし、土下坐、斬捨御免の習慣に養はれたる人民をして、不十分ながらも代議機關の運用を解せしめ、不完全ながらも自治制度の施行に堪らしめたるは、其中八九政黨の勳業にして、宜しく須らく我憲政史に特筆大書す可きものなり、國民の政治思想を教育したるの一事に於ては、何ものど雖も政黨と

(三五)

功を争ふこと能はず、文部省、帝國大學等幾個を持ち來るも、此一事に於ては、政黨の脚下にも企て及ぶ可からず、唯此一事あり、半生を政黨の爲に費やせる板垣伯等の名は不朽なるを得可し、板垣伯等の榮譽は永く我憲政史上に耀く可し、薩長の大勳高爵等以上に耀く可し、板垣伯等は政治家としては失敗せし者ならん、然れども國民の誘導者として、特に最も大切なる時代の誘導者としては、他の政治家等よりも成功せし者なりと言はざる可からざるなり、政黨は政治思想の教育者として成功したる者なり、然れども、政治思想の教育は、政黨の目的にあらずして其手段なり、而かも其最初の手段なり、政黨は其最初の手段に成功して、其最後の目的即ち國民政治の活現に成功せざる者なり、國民政治の活現に成功せざるは、藩閥打破に成功せざるが故なり、敢て問ふ、政黨は何故に藩閥打破に成功せざるか、此



(四五)

疑題に答へんが爲に、先づ政黨の要素、實質及び其變化に就て觀察する所なかる可からず、

政黨を創作したる者は、薩長の藩閥的勢力に逐はれて、政府を出でたるの失意的政治家なり、創作者の本願は、政黨的勢力に依りて、再び政府に入るに在りしことは論無きなり、是れ何れの政黨に就て見るも然る所にして、政權は目的、主義は手段、主義を行はんが爲に政權を欲するにあらずして、政權を得んが爲に主義を求めたる形跡あり、即ち我國の諸政黨は、其誕生の事情、早く既に政權を重じて主義を輕するの傾向を帯びしを記憶せよ、政黨の核心をムキ出して言へば、此の如きに過ぎずと雖も、幾層の包皮之を纏ふて發達するに及びて、其外觀壯麗人目を驚かすに至りぬ、藩閥に容れられず、容れらるゝを肯せざる少壯俊秀の人士例せば馬場辰猪氏の如き、小野梓氏の如き、慶應義塾、大學、其他に於

(五五)

て文明の學術を修め、現在諸黨中に散在する諸氏の如き、同時政府の人才に比して、優るあるも劣らざるの才學、意氣を負ひし人々が、政黨に據りて藩閥と闘はんとするに及びて、政黨の光焰頓に加はり、其議論亦力あるに至れり、中央に於ては此の如し、地方に於ては如何と云ふに、多少の識見を有して、産業を有せざるの士族と、多少の資産を有して、肩書を有せざるの農民とは、先づ政黨に入りて其要素を成せり、此等の人士は、卑屈なる素町人、土百姓と同列に立て、當時威焰赫灼たりし地方官吏の前に低頭するを肯せず、其首領として板垣、大隈等の豪傑を纏く政黨に據りて、以て官吏の向ふを張らんと欲せり、此時代の官吏も亦一種の蠻族なりき、巡查の如きも亦一郷の虎なりき、其人民に對するの權柄づくなる、其生活の贅澤なる、而して其上官に阿附するの醜劣なる氣概ある地方人士の黙視する能はざる所なりき、彼等が政黨に入りし重



(六五)

もなるモチーブは、實に官吏の鼻柱を挫かんが爲めなりき。地方にも鈴木昌司翁、小林雄七郎氏等の如き偉人あり、早くより薩長の天下を奪はんと計りし者無きにあらずと雖も、概して言へば藩閥の末流たる官吏と闘はんと欲せし志士のみなりしなり、政黨は豫記の如く官吏と闘ふの利器を彼等に與へたり、自由民権主義、何ぞ其斬新にして活潑なるや、官吏公僕説、奇警にして痛快なりと云ふ可し、壓制政府顛覆論に至りては直に是れ俗吏の肝膽を破りて、平生の齷屈を散するに足るもの、地方の政黨員は、先づ此等の利器を揮り廻はして、官吏の大攻撃を始めたなり、彼等は中央政府に對する所以の牛刀を藉り來りて、地方の雞的官吏に差向けし者なり、其状笑ふ可きに似たるも、之に依りて地方の人心を激動して、封建時代の遺風を破り、俗吏の跋扈を叱咤して、間接に中央政府を刺衝したるの効力は尠少ならざりき、政黨漸く發達して、中央と地方

(七五)

との脈絡相通じ、思想の交換自由なるに至りては地方人士亦天下の事を解し、更に中原に向て動かんと欲するに至りし頃には、諸政黨の意氣最も壯にして、何れも藩閥の實力を誤算し、藩閥を以て元治、慶應時代の幕府と同一視して、少壯血氣の人士は、暴舉一發して以て之を倒さんと欲し、血腥き事件相紹て起るに至れり、當時自由黨の言動を罵て疎暴過激と爲し、自ら温厚の紳士に擬して、俗界の人心を收攬せんと計りし狡猾なる改進黨と雖も、遅くも國會開設の曉には、藩閥は倒るゝに相違無しと妄信し、議院に多數を占むる者、直に政府を乗取り得可しとのお目出度き考案を立て、一意其方針の上に運動したりき、政黨の最も活潑ありしは、其發起より憲法發布の前後に至るの間にして、主義上の爭論、闘議は殆ど絶頂に達して、活潑々地の勢、俊偉光明の氣、其間に國民の政治思想を開發せしこと凡そ幾何なるを知らず、中央、地方共に前途の



天下を夢みて、夢中に政黨に歸依する者多く、一時の形勢頗る頼もしきものありしに拘はらず、危機の早くも政黨内部に動き始めたるを知りたる者、殆ど是れなかりしを恨事なる、

政黨が待ちに待つたる國會に入りし時は、悲哉、其精力の過半を消亡せし時なりしなり、直に藩閥の天下を受取らずんば、殆ど自ら保つ能はざらんとする時なりしなり、是れ實に政黨が藩閥の實力を誤算して、一舉に突き崩し得るものと妄想し、其精力を途中に濫費したる爲にして、今日敗軍の素因を成せし大失策なり、是れ尙ほ可なり、當初外に對する不平に主義依り凝結せる政黨は、國會開設の前より、内に於ける報酬主義に由りて、徐々其筋骨を緩めつゝあり、國會ありて後、其忠害益甚しきに及び、遂に主義一本槍の往時と比較すれば、墮落頹廢見るに忍びざる迄に至りたるなり、報酬主義とは何ぞや、議員選舉の報酬、以て黨派

と黨員との關係を保つての謂ひなり、政黨の初期に在りては、黨員の求むる所、唯黨派の勢に據りて、官吏又は政府に對する不平の氣を吐かんと云ふが如く、極めて單純なるものにてありき、識見、意氣更に一步を進むるに及びて、理論、主義を主張して、以て政敵に當ると云ふが如く、極めて正直なるものにてありき、然れども政黨の發達するに従て、其勢力自ら加はり、議員選舉の如き、政黨に在る者にあらずんば、容易に勝利を得ること能はざるに至り、黨員は從來無邪氣に抱持し來りたる黨勢を利用して、議員の名譽を買はんと欲し、唯此野心を果たさんが爲に入り、政黨が其主義を實行せんが爲に、國會議員の撰舉に競争するは當然の舉動なれども、主義の實行には毫髮の關係も無き、縣會村會等の議員撰舉を迄競舉して、淳厚なる民俗を傷け、自治制度の發達を妨ぐるを願



(〇六)

みるに暇あらざるに至りたるは、黨争派轢の余弊其他種々の事情に是れ因ると雖も、要するに此の如くするにあらざれば、以て黨員の慾望を飽かしむるに足らざるが故なり、大は國會議員より小は村會議員に至る迄其撰舉に黨派の干與せざるは無く、議員候補者は多く黨派の撰定に係ると雖も、其選定は報酬主義より割出して、必ずしも人物の智徳如何を論せず、國會議員の如き一黨の体面に關する者は、勢自ら黨の領袖を推さざるを得ずと雖も、これすらも近時は變調して、運動費支出の力あるにあらざれば、功勞なる先輩と雖も、之を推選するを肯せざるの風あり、才識拔群、品性高潔、天晴れ代議士として適當の俊傑ありとするも、黨派の古株にあらざれば推選せず、黨派の古株なるも、運動費を供給するにあらざれば推選せず、運動費次第にては、新來の輕薄才子も押し戴く可しと云ふに至りては、報酬主義の極弊、政黨をして議員選舉請負者たらしめたりと言ふ可し、近時國會に、素性怪しげなる議員の繁殖したる所以にして、老獪なる富豪家の如きは、政黨の脚元を見抜きて以て與みし易しと爲し、平時は之を蛇蝎の如く言ひ做し、イザ必用と云ふ場合には、金力以て之を爪牙と爲して、其野心を遂ぐる者往々是れあり、加之ならず、政黨が議員選舉に熱中してより、其目指す所の人民は撰舉有權者に外ならずして、撰選有權者を味方となさんか爲には、何ものを犠牲とするも顧みざるの陋習を生じ、結果政黨は少數の資産家（即ち撰舉有權者）に阿諛して、其他の多數人民を度外視するの怪物となり、其主眼たる政治主義の宣明を忘却して、唯種々の計策以て地主其他資産家の歡心を買はんとするに努め、非地租増徴論の如き、地主等の利害に關する問題は、迂濶と知りつゝ尙ほ之を擲つ能はざるも、細民の狀態を改善す可き方策の如きは、今に至るも之を等閑に附するの有様なり、財産の多

(一六)

政 登 論



(二六)

寡を以て撰擧權の有無を分ちたる制度の流弊なりと云ふと雖も、政黨固より其罪を遁るゝ能はず、夫れ此の如し、藩閥の權勢を奪て、國民の政治を行はんと欲せし、當年の意氣今何處にか在る、一主義の下に立つと雖も、各人の目的は千差、一黨派の裡に在りと雖も、各人の意思は萬別地方に在る者は、唯地方に之を利用せんと欲するのみ、中央に在る者は唯中央に之を利用せんと欲するのみ、中央と地方とに於ける政黨の目的意思全く相異なりて、痛痒相關せざる者の如し、事茲に至りて、天下の政黨たる所以の實質は殆ど空しきなり、怪しむ勿れ、代議士が東京に出で、藩閥と結托するも、官職を狩獵するも、黄金の爲に變性するも、主義、本領を滅茶々にするも、其撰擧區の黨員は意外に無頓着、無感覺にして、敢て起て不信任を叫ぶ者の如きは、其實例全國に多からざることを、代議士は代議士たり、縣會議員は縣會議員たり、村會議員は村

(三六)

會議員たり、平黨員は平黨員たり、一主義の下に立ち、一黨の中に在りと雖も、其利害は各相同じからず、直接に自己の得失に關せざる限りは其黨派の地位、方針が如何に變更するも、其代議士が如何の眞似を爲すも、特に神經を痛ましむるに及ばずと思惟する者滔々皆是なるが故なり吏黨と呼ばれるは、政黨に取りて穢多と云はるゝよりも尙ほ甚しき耻辱なるの時代ありき、然るに今や、吏黨となる者却て人氣を得るは事實なり、聞道らく、進歩黨の所謂人才連が現内閣に登用せらるゝや、同黨支部は先を争ふて祝辭を寄せ來たりと、人心の墮落殆ど小説的なるにわらずや、今日諸政黨に在りて最も熱心なる者の多くは、大小各種の議員及び其志願者等に外ならず、此等の志士は、若干の運動費を寄附して、以て其地位を保ち若しくは之を得んと欲する者にして、黄金以て名譽を買はんとするの好事者連中なり、尙ほ本來の面目を存じて、飽まで其主



(四六)

義本領を樹て通さんと志し、逆境に久處して變せず、艱難と苦戰して屈せず、眼を大局の上に着けて、他日の風雲を俟つ底の人物は、諸政黨を通じて寥々晨星も嘗ならず、政黨の頹廢實に意想外に在りと言はざる可からず、

政黨の主義、本領に對する人心の腐敗此の如きに拘はらず、其黨派的感情の頑固は實に驚く可きなり、精神的死亡を遂げんとする諸政黨が、今尙は多少の活氣を剩すは、唯此感情の刺衝ある故なりと云ふ可し、政黨は冷かなる理想のみによりて活くる者にあらず、又感情の火を有せざる可からず、黨派的感情は黨派の生存上欠く可からざるものなりと雖も、其毒化して一種の痼疾となり、人心をして偏僻、狹隘、猜忌、嫉妬の陋習を帶びしむるに至りては、其弊害も亦甚しと言はざる可からず、黨派的感情獨り熾にして、朋友、親戚の親疎も之によりて分たれ、社交の區

(五六)

域も之によりて定められ、一家の中に反目あり、一郷の裡に争鬪あり、殖産の事業も政友にあらざれば相謀らず、公益的運動も黨員にあらざれば一致せずと云ふが如きは、過去の物語にあらざして、今尙は地方に見るを得るの事實なり、此の如きは尙は可なり、黨派的感情の爲に政治上の目的を壓し潰されて自他相争ふの理由何處に在るかを知らず、唯瘖我慢一方以て自ら他を非として、共同の大敵眼前に横はるゝを忘るゝに至りては、不靈なる黨派的感情、亦政黨墮落の一原因を爲したるなり、例せば越後の改進、國權兩派が中央策士の言を聽て、相合して進歩黨に歸一せしは、寧ろ稱揚す可き舉措なりしも、兩派の黨派的感情は毫も之が爲に融和せざるのみならず、兩派相觸れて却て相忌むの程度を増し、一党の中、權勢を争ふて、互に相排擠せんと欲し、兩派唯陋劣、陰險の術策に勞するのみにして、又政黨の目的如何と顧みるに暇あらざる者の如



きは、其一例なり、然れども、党派的感情の爲に政党の目的を失却せる者は、唯今日の地方人士のみならず、政黨創業の諸豪傑を以てして、尙ほ且つ此種の感情以上に卓立する能はず、藩閥破壊、新政建設の壮志を同ふするにも拘はらず、分れて自由、改進黨、國權、保守種々の小党派となり、党争派轢、紛々然擾々乎たる間に浮沈消長して、互に相傷害し互に相疲勞して、皆何れも其大志を失墜し、藩閥をして獨り漁夫の利を得せしめたるは、政界著明の事實にして、我等は之を詳論するの必要無し。國會開設前後に於て、幾度か非藩閥諸政黨の聯合は企てられたりしも、一も其實効を見る能はず、特に其主義を同ふする自由、改進黨が仇敵の如く激闘して、憤怒の氣凝り固まりて今尙ほ釋けざるが如き、軌外に逸したる黨派的感情が、如何に大害を改革的運動に及ぼしたりと爲す乎、維新の當時に初聲を揚げし嬰兒が、人の父母となる程に成長した

る今日、尙ほ薩長の天下を見る所以のもの其因由一ならずと雖も、諸政黨が其有毒なる黨派的感情に制せられて、先づ一致して藩閥に反抗する能はず、却て藩閥の面前に於て、相摺み合ふの痴戯に耽りたることも、亦確に其一大因由なりと言はざる可からず、六國の黨派的感情を翻弄して、遂に六國を亡ぼしたる者は虎狼の秦なり、自由、改進黨其他の黨派的感情熾なるに乗じて、之を離間し、之を利用して、以て藩閥の權勢を維持せんとする者は政治的蠻魁等なり、蠻魁等の術策に乗りて、傀儡の如くに相闘ひたる者は諸政黨なり、我等は自由黨が長派と提携したる、進歩黨が薩派と結托したるを見て、改めて其何故なるかを言はざる可し言ふ能はざるにあらず、言ふに忍びざるものあればなり、惡魔の子なる黨派的感情よ、汝は藩閥の壽命を幾何か長ふしたる、又更に幾何か長ふせんとする、汝は天下に向て、汝が冥々裡に藩閥を扶助したる歴史を聳



高く物語らざる可からず、

頑冥固陋なる黨派的感情によりて、諸政黨が大事を誤りたるは上述の如し、之が爲に選舉場裡の神聖を瀆して、良民をして選舉競争と聽て身震する迄に至らしめたるは、更に深慨せざる可からず、撰舉場裡の紀綱壞亂殆ど其極に達したるは、素より獨り諸政黨の罪のみにあらず、不正の手段に依りて、選舉干渉を敢てしたる藩閥政府の如き、其責最も大にして、其凶暴の所爲は永く憲政史の筆誅を受けざる可からず、選舉人民の幼稚未熟にして、獨立不羈の意見氣象を具へざるが如き、亦一因たるに相違無しと雖も、諸政黨が君子的競争以外に奔逸して、自ら以て得たりと爲したる咎めは遂に追るゝ能はざる也、毒風最も激げしき衆議院議員選舉が、如何の状態を以て行はるゝかを示さんが爲に、或人が近時埼玉縣第五區の補欠撰舉を觀察、評論したる一文を左に掲げん、

此程舉行せし埼玉縣第五區の衆議院議員補欠選舉競争は同縣第三區鬪きの競争の如く表面上血雨を迸らせるほどの暴動はあらざりしかど其裏面においてはいつもながら言ふに忍びざる卑汚醜怪なる事實のみ之あり痛歎措く能はず因て左に其一斑を述べ世間同感人の參考に供す

新自由黨候補者持田直氏當選舉に關する三不思議

舊來自由黨に熱心尤も盡力家たりし持田氏が今回の選舉に際し如何なる仔細ありしか俄然脫黨し忽ち新自由黨に入り其候補に立てり之に拘はらず該縣自由黨が何故にか頰りに之れに應援したること是れ怪しむべき不可思議の第一事なり

元來持田其人は中山道本庄町の一小商家に生れ微々たる小學教員より追々縣會議員迄出身せし人にて是まで名儀のみにもせよ屢々衆議院議員候補者に立ち幾分の散財をなし貯蓄はさておき選舉被選舉權の資格



すらも全く已れが所有にはあらざる程の薄産にして平素公證人を業とし辛くも世を渡る身分にありながら假令幾部分か賛成有志人の助成金ありたるにもせよ其素寒の貧生が今回の競争に一萬有餘圓を費消したかどの事は實に怪訝に堪へざる不思議の第一事なり

いかに政海混濁の世の中なりと雖ども曩さには同臭味なりとて進歩党と共に第三區大島派を潜かに援けたる新自由黨が忽ち之に反し多數の多摩壯士を以て持田を助け進歩派と必死に挑戦し況してや其競争費數多を補助したりと云ふ如きに至りては尤も奇怪なりとす斯く新自由黨本部が餘裕あるは近來同本部に「金のなる木が天降りし」にあらざらん歟又是れ不可思議なる一事と云ふべきなり

進歩黨候補者萩野六郎氏此選舉競争に關する三不便利

萩野氏は埼玉縣第四選舉區内大里郡に舊來居住せる事故第五區兒玉秩

父の兩郡には自然平常交際少かりし故或は撰舉人中重も立てる人にも一面の識なき者あり其下級に至りては其姓名をも知らざる者ある次第なりし故當初其面を識られ名を知らる迄の間競争上特に不便利を感じたり是其一なり又た同氏は同縣内にて屈指の素封富豪家にして三十有餘齡の少壯者なればその候補に立つに當り彼の撰舉競争周旋屋的貪戻の徒輩が其氣勢に付け込み最も大業に之れを慫慂し所謂「御入用かまへなし」との過大の組織を以て競争を開始したる爲めに其冗費夥しく強ひて半途に之を節約せんとせしも勢ひ制止すること能はず遂に其競争終始の費用大約一萬六千有餘圓の多額に上りしと云ふ同氏撰舉得票五百〇四票を一萬六千圓にて買收したるものとすれば一票買價三十一圓五十錢に當る實に驚くべき昂價と云ふべきなり斯く昂價の買票金が全然各撰舉者の囊中に入り其ふところを温ためしものなんか決して左



にあらざらん一半は買収金及び他の諸雜費に支消し或は其一半は競争に盡力せる有志者内に在る周旋屋的の狡徒が「御爲どかし」に自己の懐を肥やせしやも知るべからざるなり但し事の過大に失し意外にも費資の多きに超過したるは荻野派が此撰舉に付又第一の不利と云ふべし平素該地方に頗る信用を欠きたる選舉周旋屋的浮薄の徒輩が該撰舉百事を左右する傾向ありたりしが爲め競争上大に信用を欠き又撰舉人護衛の爲め幾多の壯丁を雇使したるも偏に沈着を主としたる故反對派壯士の狂暴に對していつも防守の地位にのみ立ち其運動の不活潑なりしと是亦競争上不利なりしと云ふ(中略)

思ふに今日の撰舉候補者たる人一朝當選の榮を得議會に立つて各々其平素抱負する所の主義言論を實用し國を利し民を益せんとする確乎たる一念より財産を擲ち人命をも賭し之が競争を爲す其心事誠に嘉賞す

べきが如しと雖も今日競争の事實は全く之れに反し眞に人民よりして撰舉の榮を得たるにあらす只暴力を以て貴重の人權を迫奪し金力を以て選舉の投票を強買し一身一時の虚榮を貪るもの多きに居る夫が爲め素朴多數の人心を腐敗せしめ地方百般の自治を阻害するに至る其毒害實に尠少ならざるなり論者或は曰はん國家に大功を立んと欲する何んぞ一地方の小瑾を顧るに暇あらんやと是固とより至言なるべし然れども現に堂々たる廟閣の衰職が天下に公にせし政治の宣言を實行して其職責を竭す能はざるが如き政海の混濁逆流に徴して其言ふべくして行はれざる推して知るべきなり況んや無数の公權を強いて犠牲に供し一時代議士の虚榮を得たるを階梯となし近時新たに行はるゝ人材登用の浮べる榮利の雲途に登らんことを僥倖せんと欲するが如き妄想を抱く卑劣極る徒多き痕跡あるにおゐてをや今にして此政海混濁の弊源を杜



(四七)

絶一清せずんば來年總撰擧の時に當り闇濁の狂瀾を平地に暴溢し不測の害毒を社會に流すに至らん歟實に長歎大息に堪へざるなり聊か觀察する所の選舉事實の大要を陳べて江湖同感の士に訴ふ

此の如きは獨り一部埼玉縣にのみ現はれたる事實にあらず、實に是れ全國の各選舉區に行はるゝ怪事醜態のパンラマなり、世道を毀け人心を害すること凡ろ幾何なるやを知らず、代議制度の基礎早く既に腕力、金力の震撼する所となる、憲政ありと雖も夫れ之を奈何かせん、我等は實に諸政黨の猛省を求め、國民の發憤を促がざるを得ざるなり、

諸政黨が自ら力の強弱を度らずして、一意中央政府を乗取らんと争ひ、之が爲に後方勤務を欠き、地方の開拓を怠り、民心の教導を忽にし、活力の補充を得ずして、中途に立往生するの厄運を招きたるが如き、東北と云ひ九州と云ひ四國と云ふが如き地方的感情を脱却する能はずして、

(五七)

動もすれば乃ち分裂せんとするが如き、黨門を狹隘にし黨情を固守したるが爲め、天下俊才の望を失ひ、學者と言はず、實業家と言はず、文學者と言はず、其他諸種の人物と言はず、苟も政治上に志ある者を招ぎ致す能はざるが如き、青年を愚にして壯士として使用したるが故に、才識ある後進者をして後を向かしめたるが如き、政黨自ら教育することを爲さざりしが故に、日新の思想に遅くれ果てたるが如き、黨員各自其選舉區の得失を懸念して、天下の大事に冷淡なるに至りたるが如き、我等は之を詳説せず、詳説せずと雖も其政黨不振の現著なる素因たるは無論にして、我等は諸政黨何れも自ら大革命を行ふて、以て骨髓より一新し、敢て生れ代り來るにあらずんば、到底中途に立往生するを免れずと斷言せんと欲す、

狀況此の如きものあり、諸政黨の薄志弱行を怪しむ勿れ、其腐敗墮落を



怪しむ勿れ、天下の志士を以て自任する者の中より、黄金に節を變じ官職に腰を屈するの劣奴を出すに至りたるを怪しむ勿れ、藩閥の雇兵となりて人に誇る者あるを怪しむ勿れ、蠻魁の奴隸となりて自ら賀する者あるを怪しむ勿れ、改革の鼓聲死して、民權の旗影没したるを怪しむ勿れ、政治的蠻族の毒手は諸政黨を左右して、諸政黨自ら政變の群たらんとするを怪しむ勿れ、我等は既に政治的蠻族を以て藩閥を論じたり、而して政黨も亦之を以て論せざる可からざるに至る、之れ何等の不幸や、我等は人民の胎中より出でたる諸政黨を呼ぶに、政治的蠻族を以てするを好まず、然れども事實は我等の評論よりも有力にして、政黨變化の事實は現に世人の耳目に明かなるを奈何せんや、ア、

政變攻撃大同盟

被害の區域廣し || 政黨、策士、論客等に一任するを得ず ||

新人物新思想の輸入 || 社會各部各層の活動 || 選舉法改正

|| 時機 || 中心的識者 || 個人の性情と種族の習氣と || ク

ラス、バイアス || 非藩閥大運動の効果 || 破壊は急進的なら

ざる可からず

藩閥的勢力は、常に憲政の發達を妨ぐる勢力たるのみならず、又實に社會の調子を狂はするの勢力たるなり、政治的蠻族は獨り政權を壟斷せんとするの蠻族たるのみにあらず、又實に人權を侵害するの蠻族たるなり、一世の名利、權勢其占領する所となれるの事實あるに於ては、其影響を受くるもの廣く且つ多く、固より政治の一局部に止まらざるを知るに足る、

一方に於て、閥族と結托して經濟社會を掻き廻はすの實業家あり、一方



(八七)

に於ては、之が爲に利權を失ふ多數の商工業家あるを知らざる可からず、一方に於て、閩族に取り入りて、政權の保護を受けんと欲する宗教家あり、一方に於ては、之が爲に弘法を妨げらるゝ宗教家あるを知らざる可からず、一方に於て、閩族のお蔭によりて、不當の勢力を揮ふ學者あり、一方に於ては、之が爲に進路を遮ぎらるゝ學者少なからざるを知らざる可からず、一方に於て、閩族に阿諛して、不正の方針を取らんとするの教育家あり、一方に於ては、之が爲に毒せらるゝ無数の教育家及少年子弟あるを知らざる可からず、一方に於て、閩族に追従して、身分不相應の地位を得る輕薄才子あり、一方に於ては、之が爲に不遇を嘆する俊傑多きを知らざる可からず、一方に於て、閩族が特に其恩惠を厚くする地方あり、一方に於ては、之が爲に利益を奪はるゝ多くの他の地方あるを知らざる可からず、一方に於て、閩族が保護を與ふる事業あり、一方に

於ては、之が爲に競争の自由を失ふ許多の事業あるを知らざる可からず、藩閩の勢力の流毒は、獨り政治の局部に止まらずして、廣く社會全面に及び、政治的變族の凶威は、深く人心の内部を侵かして、人の才智氣風までを壓するに至れり、苟も獨立不羈の精神を有し、自尊自重の大義を知るの人士は、政治、經濟、宗教、教育、技藝、文學等の局部を異にするを問はず、業務の如何を論せず、起て之に反抗して、時弊の大根本を抜き去らざる可からず、非藩閩、非政變の大運動、豈に之を諸政黨及び策士、論客等の力にのみ委す可けんや、

直言すれば、疲勞の極に陥れる諸政黨、信用地に墮ちたる策士、論客等現状の儘にては、到底藩閩打破、政變掃蕩に成功するの見込無きなり、彼等が非藩閩を唱ひながら藩閩と結托し、非政變を論じながら自ら政變化したる大失策、大失態の如き、之を追咎するは苛酷なり、彼等も亦親

(九七)



しく藩閥の苦味を喫し、直に政變の陋風と接して、大に發明開悟する所ありたるに相違無く、藩閥、政變の決して事を共にす可からざるを實驗したりとせば、既往の大失策、大失態は、適ま以て其の興奮劑たるを得可しと雖も、然れども我等は、諸政黨の内部に大革命を行ひ、策士、論客等の心情に大刷新を加へ、頑冥なる黨派的根性を一掃するは勿論、彼等をして薄志弱行ならしむる一切の病毒を除き去るにあらざるは、到底之を信任する能はずと斷言す、我等は今日の急務として、今日迄の諸政黨、策士、論客等以外に、未だ政治上に發現活動せざりし新人物、新思想を社會の各部より喚起し、經濟、學問、文學、教育諸界の裏面に潛伏する、對時世的意見を表面に誘出し、且つ從來政治上に代表せられざりし社會中等以下の人民に發言權を與へて、其勢力を政界に輸入し、社會の各部、各層に於ける非藩閥、非政變の心情を發揮し綜合して、以て大

風潮を作り、大運動を起さざる可からずと信ず、

社會の各部、各層の心情が、並進的に政治上に、發現活動せざるは、憲政尙ほ未だ發達せざるが爲にして、憲政發達せざるは、閥族政變等の妨害に是れ因ると云ふと雖も、又實に社會の各部、各層が、多く政治的思想を斥け、政治的運動を賤しみたるの過失に出でずんばならず、諸政黨及び策士、論客等の言動が、往々疎野矯激に流れたるは、世の所謂良民が政治を口にするを憚るに至りたる一因由なる可しと雖も、人民の智徳を以て最大の基礎と爲すの憲政行はれて、尙ほ且つ政治の利害得失に無頼着、無神經なるが如きは、所謂良民なる者の多くが、未だ全く封建時代の素町人、士百姓、御かゝり儒者、御扶持武士の卑屈根性を脱却せざるが故なりと言はざる可からず、政治の影響を受くるに於て、商業の如きは其最も痛切なるものなり、然るに世間の商業家政治の利害得失に無



頓着、無神経なる者十中八九、是れ尙ほ可なり、商業家の撰ばれて國會に入る者は、概ね所謂先天的吏黨にして、如何の政府にも盲従するを以て常態と爲すに至りては亦太甚しからずや、商業會議所の意見の如きは内閣大臣を動かすの勢力ある可き筈のものなり、然るに全國の商業會議所一致の決議が、政府の藐視する所となるも、特に之を意に介せざるは我國の商業家にあらずや、政治と密接の干繋を有する商業家にして此の如し、社會の他部、他層の人々が、閥族、蠻魁の時弊の大根本たるを知りつゝ、袖手傍觀し來れるも亦怪しむに足らず、此種の人々は、諸政黨及び策士、論客等を輕侮しながら、政治改革の大事を擧げて其輕侮する者共に一任し居りたるなり、之を狡猾と言へば他人の力を盗まんとするの狡猾なり、之を迂愚と言へば、自己の得喪を顧みざるの迂愚なり、然れども、政黨等未だ其志を就す能はざるに、時勢益々急、國家内外多事

國民の負擔益々重からんとするの今日に至りて、一世の人心は期せずして政治改革に歸嚮し、實業界の重立ちたる人々の如きは、敢て政界に打て出でんとするの徵候あるに至れり、是れ實に未曾有の時機なり、時機は逸す可からず、社會各部各層の心波を政海に捲き起して、以て非藩閥非政變の大同盟、大運動を起すの時機は實に今日に在り、衆議院議員選舉法を改正し、財産を以て選舉權、被選舉權を限るの制を廢し、局部代表の弊を除き、社會の各部、各層をして一様に議政に參與せしむるが如きは、新人物、新思想を政界に注入して、藩閥、政黨對峙の舊局面即ち窮局面を一變する所以にして、我等は之を以て、啻に藩閥を非とする者に取りて緊急無比の方策たるのみならず、又實に政黨に敵する者に取りて適切無二の手段なりと信ず、蓋し今の諸政黨の脊髓たる代議士は、制度上十中八九中等以上の地主を代表する者にして、其根據



は少數の財産家なるが故に、選舉權を擴張して、中等以下の人民に迄も及ぼす時は、彼等は非常の激動を感じて、其地位を失ふ者必ず多からざる可からざるなり、閥族にして乾坤一擲成敗を賭するの大機略あらば、想ふに必ず選舉法改正の奇計を行ひ、從來選舉權を有せずして、諸政黨に蔑視せられし中等以下多數の人民を靡ぎて、以て一舉して諸政黨を死地に陥れんと欲するならん、閥族が活眼の策士を有せずして、斯る奇計を用ゆるに及ばざるは、諸政黨の僥倖なりと雖も、諸政黨が主義上撰擧法の改正を主張するに拘はらず、敢て其の實行に努ざるは、怯懦も亦甚しと言はざる可からず、選舉法改正の如きは今日急務中の急務なれども一世の人心を教導して、改革、新政の途に向はしむる者あらずんば、社會の各部各層たどひ普ねく制度上に發言權を得るも、其形散漫其勢空疎にして容易に閥族に瞞着せられ、黄金、權勢の香餌に釣られて、改革の

精神を失ひ、非政變の大同盟は、或は空想虛名に過ぎざるに至らん、其實例は近く諸政黨の大失策、大失態に在りて、實に些も油斷す可からざる所なり、夫れ然り、人心を警醒し、國民を激勵し、政黨を訓誡し、策士、論害等を教導して、改革の大運動に一致せしむる中心的識者、首領的人物を需むる今日より急なるは無きなり、今や政論都部に熾にして、其機關たる新聞紙、雜誌の如きは幾何なるやを知らず、一方面の識者、一黨派の首領、其人に乏しからずと雖も、一代の人心を統率し、社會の全面を風動して、政治思想の大潮流を起すに足るの偉人は、不幸未だ之を見るを得ず、然れども、此種の偉人は時世の必要にして、既に需用あり必ず其供給無きを得ず、此種の偉人の生ずること萬疑ふ可からず、非藩閥の大運動は是非とも起らざる可からず、非政變の大同盟は必ず成就せざる可からず、



(六八)

閥族と言ひ政體と呼ぶ、是れ其階級、種族の概稱なり、個人に就て論ずれば、薩長の政治家を擧げて没分曉漢なりと云ふ可からず、藩閥の人物等、概ね忠君愛國の誠意に富む、其功業は固より没す可からざるものあり、其心事も亦取る可き所無きにあらず、朴直なる民間の人士にして、十年敵視の後に彼等と親接して、忽ち意氣相投じ、提携して國事に盡力す可しと誓ひたる者ありしは之が爲にして、曩に進歩黨より仕官したる二三者の如き、同黨政府と絶縁したる今日、尙ほ其情誼を忘るゝ能はず志賀の矧川漁長の如きは、其最たる者なりと傳ふ、彼等の個人性を觀て其階級、種族に於ける氣習を問はざるに於ては、さもある可き次第なり同じく是れ人類たり、同じく是れ日本人たり、しかも同時代の日本人たる以上、其個人性に於て、我等と藩閥の人物等との間に、大なる差異ある可き筈無ければなり、大なる差異あるは、其階級、種族の氣習是れな

(七八)

り、藩閥の階級、種族としては、飽迄も政權を獨占するの權利ありと信する者の如く、社會の名利、權勢を横領するの理由ありと信する者の如く、之が爲に多數人民の活動を妨害するも、一世人心の發達を抑壓するも、止むを得ずと信する者の如し、苟も其階級、種族の領域を侵さんとする者あれば、極力之を排擠して、一毫も假借せざる所以にして、政治的蠻族の性情は此處に發現して、其個人の性情とは殆ど全然相異なるが如し、一個人としての薩長人士と、閥族としての薩長人士と、互に相反せる性情を示すとせば、一の奇蹟なりと言はざる可からず、是れ何故や、想ふに、薩長人士永く治者の地位に在りしが爲に、感情上大に被治者と相遠ざかり、被治者と相遠ざかりしが爲に、自ら被治者の智徳を余りに程度に見計らひ、被治者の智徳を余りに低度に見下すに至りて、人民の心情に信任する能はず、久しく自ら運用し來りし政權を此の如き人



民に譲り渡すは危険の極にして、萬一の事あれば、君國に對して申譯無しとの妄想凝て、其階級、種族の性情となりて牢平抜く可からず、一切萬事此の如き性情によりて處斷したるが爲に、自ら其沒道理なるを覺知する能はざりし者ならんか、若し果して然りとせば、是れクラス、バイアスに溺れて、本然の智能を鈍らしたる者、其衷情は憐む可くして、其境遇は悲しむ可しと言はざる可からず、然り而して其總ての過失は、此上の非行を防ぐは、實に唯更に大に進で之に國民の真相を明示するの策あるのみ、藩閥の階級、種族は、從來の諸政黨、策士、論客等を以て、唯是れ私心を行ひ私憤を漏らさんとする者のみにして、國民の公議輿論を代表する者にあらずと思惟せしが故に、敢て醜怪兇暴の手段を以て之に當りしならん、若し果して然りとせば、國民的大運動を起して、

正々堂々以て一世人心の方嚮を發現すれば、藩閥の人物等も、始めて國民の真相を了解し、政治的蠻族も頼に開悟する所ありて、或は直に天下を譲り渡すならん、非藩閥の大運動、非政蠻の大同盟は止む可からざるなり、要するに、今日の最大急務は、國民の政府を建設して、國民の國家を活躍するに在り、是れ實に維新革命の眞意思、大目的を遂行するものにして、人民智徳の精粹を代表する者をして、政治的機關の運轉に任じて、四面皆危機の間に國家を統督誘導せしむる所以、之を措て他に求む可からず、然り而して舉國の總奮發、社會各部各層の大運動を以て、先づ藩閥の特權を打破し、政蠻の跋扈を防遏し、政界を廓清して、人心を一新するにあらざれば、國民の政府、國民の國家を見ること、果して何の日にか在るを知らずして、帝國內外の形勢は、一刻も現狀に留まるを許さ



い●る●も●の●あ●り●、●是●れ●時●弊●の●大●根●本●を●覆●へ●す●に●於●て●、●漸●進●的●な●る●可●か●ら●ざ●  
る●所●以●に●し●て●、●我●等●が●敢●て●急●進●的●破●壊●主●義●を●主●張●す●る●所●以●な●り●、

# 時 弊

一の改革黨無し 有毒なる上下一致 主義無  
差別利害有差別 第二維新の夢 人の形せる  
悪魔 代表せられざる人民 罪惡を默許する  
の罪惡 人の問題 政論の墮落 時弊の根本  
改革、新政の聲政界に滿つ、而して弊を尋ねて、其起る所の實体如何と  
觀れば、一として非改革、非新政の黨類ならざるは無し、非改革、非新  
政の黨類と云ふ、獨り藩閥の鎧の上に改革、新政の法衣を纏ひ、偽善以  
て一世を欺かんとする現内閣方の策士等と、此策士等と通謀して、甘じ  
て偽善政治を助長せんとする進歩黨とのみにあらざるなり、政界の諸黨  
派、諸勢力を擧げて、悉く非改革、非新政の黨類たるなり、今日の政界



(二)

は實に是れ、此の如きの黨類が、各口に改革、新政を唱へて、而して非改革、非新政の志を遂げんと競争するの魔界なり、此等の黨類は慈母を假裝するの悪魔の如く、國民は猶は無邪氣なる兒童に似たり、悪魔は先づ慈母の愛を示して、以て兒童をして疑ふ所無く馴れ近かしめんとし、其馴れ近くを見るに及べば、直に捕へて以て其貪慾の犠牲に供せんとす危途に立て自ら覺らざる者は我國民にあらざるや、現時の日本には、一の改革黨無し、政界満目、皆な是れ改革の名に依りて、非改革の實を行はんとする黨類のみ、是れ實に政治上の一大欠乏なり、然れども、我國民は毫も此一大欠乏を感知せざる者の如く、平然として非改革、非新政の黨類の跋扈跳梁するを見る、是れ我國民は改革、新政を無用と爲すに因るか、將た改革、新政を需求するも、起て之を成し遂ぐるの氣力消亡したるに因るか、孰れにもせよ、若し此儘に放置す

るに於ては、國民も亦非改革、非新政の黨類たるに至る可きなり、上皇室の威風を圓滿に弘布し、下人民の勢力を十分に暢達し、上の威風と下の勢力とビタリと直接して、上下の情意求めずして一致し、其間に過ぎたる媒介者をも要せず、厄介なる邪魔物をも容れず、君權と民權と表裏して相離れず、異名にして而かも相刻せず、舉國一体となりて自由活動するところ、上下一致の真相なれ、皇室の尊榮を増進すと云ひ、人民の權利を擴張すと云ひ、憲政の精神を發揚すと云ひ、責任内閣と言ひ、政黨政治と云ひ、世論俗説紛々たりと雖も、其極致を尋ね、其精粹を檢すれば、亦唯此の如きの靈域に達せんと企圖するものたるに外ならず、

(三)

今の政界を横領する黨類の所謂上下一致は、余輩の所謂上下一致と全然相異なれり、今の黨類は、薩長の閥族の政權を有する者を指して上と稱



(四)

時弊

し、自ら屈して下と呼び、薩長の閥族に對して降伏的調和を試みるを以て、上下一致の實を得たりと爲す、薩長の閥族も亦陽に上下一致を説き第二維新を唱ひ、陰に臭味相同きの黨類と結托して、其權勢の衰滅を防がんとす、彼等の所謂上下一致は、政黨藩閥相苟合して、依て以て政治的權勢を專有せんと云ふの意義を措て、他に何の取る可きもの無し、蓋し藩閥は衰弱し、政黨は老朽して、孰れも獨力以て政治的權勢を争ふに堪ぬざるに至りたるを以て、相寄り相助けて、政治的權勢を私せんと云ふの裏面の約束、即ち表面の上下一致論たるなり、此の上下一致論の爲に現時の政界に在る者は、其藩閥たるを政黨たるを問はず、悉く非改革、非新政の黨類と墮落し、政界些の光明無きに至れり、

此の如き有毒なる上下一致論の實行せらるる限り、此の如き不埒千萬なる調和の歡迎せらるる間は、政海如何の驚波乱濤を起し來るも、新政に

(五)

時弊

向て一步も進む者無く、却て益す遠さかる者多きに至る可きを覺悟せざる可からず、

一方に於て、有毒の上下一致、沒道理の調和行はる、一方に於て、主義政見の滅亡を見るは、必然の結果なり、今の政界は、唯だ内閣を取る取られじどの野武士的争鬪にて持ち切れり、主義、政見の地圖は今に至りて全然抹殺せられ、諸黨派の畛域は、單に利害得喪の殊別を表章するものとなれり、政府黨と稱し非政府黨と呼ぶ、如何の政治的方針を取る者は、是れ政府黨たるか、如何の國策を有する者は、是れ非政府黨たるか、何人も之を甄別する能はざるなり、進歩黨必ずしも進歩主義に據るにあらず、自由黨亦自由民權を主張すると定まらず、保守黨と改進黨と相雜居するに至りては、政界の混乱も亦極まれりと云はざる可からず、而かも混乱の裡に差別あり、隠然二大黨類を形成して、政權争奪の勢日に益す熾な



(六)

り、而して此二大黨類の性質を吟味すれば、何人も其争ふや主義、政見に據りて争ふ者にあらざるを認め得べきなり、政治上の主義、方針は無差別にして、政治上の利害得喪には差別を有す今の政界の真相、唯此の如きのみ、

藩閥の勢力は衰へたりと雖も、尙ほ政府の脊骨として存在す、此事實の消滅せざる限りは、假令政府をして如何に面目を革めしむるも、其藩閥政府たるを否定する能はず、現政府の如き、進歩黨其他を爪牙と頼みたるが爲に、自ら其行動の上に異状を呈し、殆ど全く藩閥の勢力を閉却したるの外觀無きにあらず、其人才と稱して若干の黨人を要地に擢用したる一事の如き、無識にして卑屈なる進歩黨輩を始めとして、時事に通せざる淺見者流の視て大果斷と爲す所にして、彼等は第二雜新の端緒を發見したるが如き思を爲すも、其實は誤想の甚しき者なり、現内閣は、歴

(七)

代の藩閥政府中に在りて、割合に多く政黨の勢力を借りたる者なるは、何人も否定す可からざるの事實なるも、此事實は、現内閣が藩閥の勢力を非とするが爲に起りたるにあらずして、却て藩閥の勢力を保たんと欲するの餘に出でたるなり、現内閣の根本は言ふ迄も無く藩閥の勢力なり然れども、其勢力は代表者其人を得ざるが爲に強大ならざるを以て、半は山縣侯、井上伯等の有する長派の勢力を借りて其組織を完ふし、一方には非伊藤派を利用せんが爲に忍で大隈伯を迎へ、大隈伯を通じて、進歩黨等を爪牙とし使はんと計りたるなり、此策は好く其圖に當りて、進歩黨等既に盲従せり、盲従の政黨は藩閥の勢力を蝕害する者ならずして却て其足らざる部分を填補する資料となる、現内閣何爲れず藩閥の勢力に不忠ならん、其諸般の行動、詮じ來れば皆な悉く之を扶植せんとするの目的を有す、大隈伯の意見、小事に於ては多く行はる、然れども内閣



(八)

の根本に關する大事に於ては、猶豫無く排斥せらる、大隈伯既に然り、  
 其他の黨人の如き或は政府の外観を飾るの彩色たるを得ん、能く實地に  
 何程の改革を成し得可き乎、現内閣は國民の意見を代表する進歩黨等と  
 結托したるにあらす、國民に裏切りして半ば藩閥化したる進歩黨等と提  
 携せしなり、進歩黨等にして全然藩閥化し、サツパリと其從來の關係を  
 絶縁するに於ては、政府も安心して彼等に許し得るに至り、彼等の意見  
 も亦從て行はれん、半ば藩閥化したる進歩黨等焦眉の急務は、實に唯全  
 然藩閥化するの一事に在り、苟も然らず、現時の如き半上落下の姿勢を  
 取り居る間は、唯政府の枝葉に觸るゝを許さるゝに過ぎず、到底其根本  
 に手を着くる能はずして、其間に自ら腐敗壞乱するに至らんなり、藩閥  
 は猫の如し、平時に在りて毫も其毒爪を露はさず、溫柔愛す可きに似た  
 るも、一怒すれば忽ち其毒爪を剥き出して人を傷く、藩閥の毒爪を抜き

(九)

取るの力量と勇氣とを有せざる進歩黨等にして、一時の外形に迷ふて、  
 藩閥與みし易きのみと思はく、早晚奇禍に逢ふを免かるゝ能はず、之を  
 是れ顧慮せず、漫然第二維新の成る所に在りと思爲す、何ぞ其眼識の陋  
 にして其心情の穉なるや、豈に閥族等の拍手嗤笑しつゝあるを知らざる  
 か、  
 長派朝に在れば、甘じて長派の機關と者也、薩派政を執れば、好んで薩  
 派の爪牙となる、何人の内閣にても、若何の政府にても、苟も喰はずに  
 多少の利を以てする者あれば、過半数の議員は直に之に歸依して、牛馬  
 とし使はれ奴僕とし役せらるゝを耻ぢず、我國會の人民の物たらざるや  
 久し、我國會の藩閥の物たるや久し、其形を見れば人民の代表なり、而  
 かも其實は藩閥の代表者たり、我國會は人の形せる惡魔なり、凡る世の  
 中にこれ程厄介なる化物はなかる可きなり、



氣の毒なるは我人民なり、彼等が人なりと信じて選出したる議員の多くは、國會に入りて化物の本性を現はし、彼等が自家の利器と恃みし國會は、政治的盜賊の兇器たるに外ならざるに至り、彼等の代議士は、矛を倒にして彼等を害せんとするの事實を見る、世界廣しと雖も、豈に此の如きの怪事あらんや、之に反して薩長の閥族は、此の人の形せる惡魔の爲に多大の僥倖を有す、薩長の閥族は、裏面に於ては、不正の手段によりて、以て人民の國會をして閥族の國會と變性せしめ、表面に於ては、我々は國會の同意、即ち輿論の同意を有す、我々の行爲は、人民、輿論の是認する所なりと呼號す、茲に於てか、諸般非人民、非輿論の事は公然青天白日の下に於て而かも人民、輿論の名に於て盛に行はる、人の或は之を詰責するれば、汝は人民、輿論の代表者たる國會の是認する所を詰責す、汝ころ非人民、非輿論の甚だしき者なれと反駁するに躊躇

せず、名分を論ずれば、國會は人民、輿論の代表者たるに相違無きが故に、斯く言はるゝも亦奈何ともする能はず、政治的盜賊をして、彌よ益す跋扈跳梁せしむるに終る、豈に慨するに堪ゆ可けんや、

政治上大改革の止む可からざるは、何人か之を感せざらん、而も大改革第一(寧ろ唯一)の利器たる可き國會は、早く既に此の如くに變性し、大改革を妨害するに於て、寧ろ藩閥其者よりも甚しきに至れり、我人民は新政、改革の手を着く可き處を失へる者にあらずや、ア、人の形せる惡魔、人民の名ある藩閥的勢力、非常の怪物たる國會、先づ之を退治せざんば、政界の邪氣は日に益す多きに至らんのみ、

目下の政界を觀察すれば、薩摩閥族の勢力、薩摩閥族を中心とせる九州人士の勢力、大に現内閣に依りて、發揮せられ、彼の九州俱樂部の一團体は、隱然政機を左右するの力量あり、俱樂部の意見直に政府の行爲と



(二一)

して發現すること少なからず、先づ俱樂部の御機嫌を窺ふ者ならずんば  
 人才ありと雖も登用せられず、一徳富蘇峯の意見は、多士進歩黨の意見  
 よりも重しとせらるゝが如き事實は、天下は九州の天下たらんとするを  
 語る者にあらずや、富豪家の勢力も亦、松方伯、大隈伯等に依りて盛に  
 政治上に發揮せられたり、一商人岩崎某は、現内閣の成立に與りて最も  
 力ある者の一人にして、或場合に於ては國務大臣以上の威勢を有す、此  
 等の勢力が發揮せられしに由り、人民の勢力はゼロに歸せんとす、進歩  
 黨の如きは、自から好んで藩閥化せんとする者、人民との關係は殆ど全  
 く斷絶せんとする者なれば、其聲の人民の聲にあらざる、其意見の人民  
 の意見にあらざる、特に言ふを要せず、其他の諸政黨と雖も、其變性し  
 て人民を代表する者ならざらんとするに於て、進歩黨と五十歩百歩の間  
 に在り、政黨既に然り、國會は人民の形せる藩閥的勢力なり、今日何者

(三一)

か人民を政治上に代表すと問はば、余輩は皆無と答へざる可らず、夫れ  
 然り、我憲政の脈管は、殆ど全く有毒なる血液を以て充たされ、純粹な  
 る人民の血液は有りと雖も、憲政を滋養して、其發達を促がすの資料たる  
 能はざるなり、此故に目下の憲政は、病毒ある憲政なり、惡質の憲政な  
 り、國家を壊亂せんとするの憲政なり、  
 代表せられざるの人民は、尙ほ未だ代表せられざるの事實を覺知するに  
 至らず、豈に代表せられざるの深憂大患を感想するを得んや、彼等は無  
 邪氣にも憲政の虚名を擁して、有毒なる黨類の跋扈に一任す、夫れ然り  
 現時の憲政は日本の憲政にあらざる、或種族の憲政なり、或地方的勢力の  
 憲政なり、或黨類の憲政なり、百年永く此の如くんば、憲政以て國を亡  
 すに足らん、  
 罪惡を默許する、亦一種の罪惡たるを免れず、薩長の閥族が、三十年來



政權を壟斷し來り、今に至りて尙ほ其私心を去りて公義に就く能はず、憲政の美名の下に非憲政の非行を遂げんと欲するが如きは、政治上の最大罪惡なり、閥族政治を以て、天意民心と相容れざる者と爲し、憲法政治の精神と背戾する者とし、先づ之を破壊せざんば、邦家民人の興隆活動得て期す可からずと爲し、之を以て自ら起ち、之を以て黨を作り、之を以て國會に入りし諸政黨が、昨非今是、翻て閥族と結托して、其爪牙となり犬鷹となり、閥族が惠與する政權の一部に有りつけは、是れ見よがしに世に誇りて、黨略其宜しきを得たるが爲めなりなどと自稱する、進歩黨の如き者を出すに至りたるが如き、亦政治上稀に見るの罪惡なりと言はざる可からず、然り而して、此の如きの罪惡を政治上に見聞して心に飽く程なるに拘はちず、罪惡を罪惡として、制裁を加へ、撲滅を謀り、豫防策を施さんとせざるのみならず、平然として大罪巨惡の政治上

に行はるゝを傍觀し、之が爲に自己の体面を傷けられ、權利を賣られ、實益を盗まるとを默許して、諸種の政治的盜賊をして、勢益す猖獗なるに至らしむる日本人民は、豈に明に罪惡を默許するの罪惡を犯しつゝある者にあらずや、余輩は敢て我人民を以て政治上の消極的犯罪者と爲し彼の政治上の積極的犯罪者たる閥族、政黨と相待て、今日の政弊を醸生したるの責、決して輕からずと論告する者なり、今日の政界は、人民を欺かんと欲するの黨類を以て充たさる、人民を欺かんと欲する者は、如何なる場合にも人民を非とする能はず、阿諛一方を以て人民の歡心を買ふて、唯其至らざらんことを懼る、閥族の各派然り、内治、外交の改革、整理を空言して起りたる現内閣の如き、之に隸屬して閥族をして民心を假裝せしむるの道具たる進歩黨の如き、其最も甚しきものなり、我人民は實に諸黨類の阿諛の爲に甘化せられ、叱り手



の無き驕兒と一般の痴態を帯び、何人にも騙かされ易く乗せられ易く致され易く慰められ易く利用せられ易き者となりたるなり、是れ尙ほ可なり、政治上の罪惡に無頓着無神經となり、罪惡を罪惡として憤怒するの心情すらも、其働き澁り鈍れるに至りては、眞に是れ非常の大患、一步を誤れば、正邪を識別するの能力を失ひ、是非を判断するの智見を欠きて、民心を買収するに巧みなる奸雄の起る毎に、甘じて其狗馬となりて遂に大に邦家を害するに至らんなり、思ふて茲に至りて誰か寒心せざるを得ん、

然りと雖も、改革、新政に志ある者が絶望するには尙ほ早し、大和民族傳來の美性は、一時の心情的疾病の故を以て、根絶す可きにあらず、病根を尋ねて一掃し、更に更ふるに滋養ある精神的食物を以てせば、我人民は忽ちにして現在の昏睡的状态より覺醒し來ること疑ふ可からず、唯

從來改革、新政を唱ひし者が、閥族其他の黨類の勁敵たるを知りて、罪惡を默許せる人民の罪惡を咎めず、人民を甘化の状態に放置して、漫に其志を成さんとアセリたるは、其失敗の一大原因なりと言はざる可からず、  
 社△會△諸△般△の△問△題△、多△く△は△是△れ△人△の△問△題△た△る△に△過△ぎ△ず△、事△の△得△失△成△敗△は△、主△と△し△て△人△の△智△愚△、正△邪△に△是△れ△由△る△は△、過△去△の△歴△史△、現△在△の△事△實△の△共△に△證△明△す△る△所△な△り△、憲△法△政△治△は△善△美△の△政△治△な△り△と△云△ふ△も△、治△者△、被△治△者△、共△に△其△人△を△得△ざ△れ△ば△、醜△惡△之△に△過△く△る△の△政△治△は△天△下△に△少△な△く△、今△人△の△蠅△視△す△る△專△制△政△治△の△、其△人△を△得△た△る△に△比△し△て△、劣△る△こ△と△幾△等△な△る△を△知△ら△ず△、今△の△政△界△の△萬△弊△の△府△と△な△り△、代△議△政△治△の△名△あ△り△て△其△實△無△き△も△亦△、畢△竟△す△る△に△朝△野△其△人△を△得△ざ△る△に△是△れ△因△る△、人△を△外△に△し△て△政△治△上△の△患△害△を△論△せ△ん△と△す△る△は△、猶△ほ△蛇△を△憎△て△其△毒△牙△を△懼△れ△ざ△る△が△如△し△、藩△閥△の△跋△扈△を△憤



ふる者、何爲れず直に薩人長人を彈劾せざる、政黨の腐敗は黨人の腐敗に外ならず、人民の卑屈は民間人きが爲めなり、王を擒にせんと欲せば先づ馬を射よ、今の政界を改革せんと欲せば、先づ朝野の人を擧げて更迭せざる可からざるなり、人は是れ舊時の人、而して政治の獨り新鮮ならんと欲するは、枯木に華かせんとするよりも難し、今の政界には主義無し、政見無し、唯權勢を攫えんとするの政治的鷲鳥あるのみ、此時に當りて、誰れの主義は是なりとか、彼れの政見は非なりとか詮索して、之に由て去就を決せんとするが如き者あらば是れ好で政治的鷲鳥の餌食たらんと欲するの大愚者也、既に主義、政見無し、如何に詮索するも、手應たへあるの主義、政見に觸るゝを得んや、主義、政見の如く見ゆるものは、是れ唯朝野諸黨類の大愚者を欺かんとする招牌たるに過ぎざるなり、事茲に至りては、政治上萬弊の本源たる人を掃除するの外無し、

現時の政界を占有する有らゆる人、藩閥各派の人、政黨各派の人、人民中人民らしからざる人も、苟も萬弊の本源たる者には斷乎として不信任の宣告を下し、之を政界以外に追放せざる可からず、現内閣の公約は美を極めたりき、而して其實行の醜を極むるは、豈に人の故にわらずや、進歩黨の言論は人民的なり、而して其舉措の非人民的なるは、豈に人の故にわらずや、其他黨類の墮落亦皆な人の故なるにわらずや、朝野を擧げて其人を得ざるは、實に今の政界の大欠乏、大忠害にして萬弊皆な之より生ず、改革は先づ人より改革せざる可からず、新政は人を更迭するの新政ならざる可からず、朝野舊時の人を一掃し去りて、新時代の新人物を以て政界を充たすにわらずんば、第二維新は唯皮相、外觀の維新に過ぎざるべきのみ、

政論の墮落は今日に至て極まれり、是れ豈に國人の識見、意氣が政治上



(〇二)

に昏睡したるが爲にわらずや、此の如くなるも亦宜なり、現時の政界全く零落の氣を以て置められ、人として疲労せざるは無く、黨として老朽せざるは無く、問題として陳腐ならざるは無く、満目荒涼、亡國の癡都に入りて、悲風落暉に對するの光景あるを思へば、

世間の新聞紙、雜誌も亦多し、其殆ど總てが政治的黨類の機關たるは人の知る所なり、政治的黨類の機關たるは不可なりとせず、唯此等の政論機關が、紛々然擾々乎無主義、沒趣味、不徳義の政論を闘はして、自ら以て得たりと爲し、之を讀む者亦毫も之を怪まざるに至りては、國人政治思想の退歩も甚しと言はざる可からず、曾て天より降りしかと思はるゝ程に偉大なる自由、進歩の聲を聴きたりき、曾て赤誠より發したる莊嚴なる國權論を耳にしたりき、主義の在る所一世を非とするを願みざる論客ありき、真理の命する所何物を犠牲と爲すも意とせざるの志士あり

(一ニ)

き、昔何ぞ公明正大にして、今何ぞ卑野汚陋なるや、而かも今の立言者自ら辨解して曰く、主義を空論して相争ふの時代は既に過ぎ去れり、宜しく須らく實際問題に就て意見を闘はす可しと、而して彼等か所謂實際問題に於て戰對するの狀を觀るに、虚心利害を考較し、坦懷以て得失を講究し、依て以て得たる所の結論を提げて、與みす可きに與みし、敵す可きに敵するにわらずして、唯情實、行掛りより生じたる憎愛の念を主として、之に従て或は是とし或は非とするのみ、進歩黨等が現内閣を辯護するは、政府黨當然の行爲に屬す、然れども其辯護の方法の極めて陋劣にして三百代言人の口調に似たるは豈に政論の墮落したるものにあらずや、非政府黨の言説、其是非を問はずして一概に政府及政府黨に反對し、主義、政綱に據りて、叱咤風雲を捲く底の大抗議を試みる能はずして、徒らに末節を嘲り小失を罵りて以て自ら得たりと爲すは、是亦政論



の墮落したるものに外ならず、之を要するに今の政界、唯意氣、識見の墮落せる藩閥、政黨等の怨言嫉語を聴くのみにして、公明正大なる心胸より發する爽快新鮮なる政論の聲は殆ど全く絶えたり、我國人は政治上に於て、日常此の如き腐敗汚穢の精神的食物を供せられ居りながら、電も自ら苦痛を感ぜざる者の如く、却て之を甘しとして貪食する者無さにあらず、此の如くにして、政治思想の健全を保つを得ば、眞個に是れ一大奇蹟なり、

時弊百端、擧げて論じ難しと雖も、窮究するに民權の發達未だ完全ならざるに是れ因る、民權未だ完全の發達を遂げず、故に皇權と民權と密着融合して、天衣無縫の極致を我憲政の上に表示す能はずして、人民を愚弄して政權を私せんとするの諸黨類、尙は上下君民の間に介在するなり、民權未だ完全の發達を遂げず、故に代議制度は、其形体に於て完備せる

も其活素に於て尙ほ大に欠乏せるを以て、諸種の政治的黴菌は、靡に乘じて其内臟を侵蝕して、遂に病的憲政を見るに至れり、民權未だ完全の發達を遂げず、故に薩長の閥族は、今尙ほ政界の覇權を握りて、根本的改革の實行を妨害しつゝあるなり、民權未だ完全の發達を遂げず、故に民權の發動に任ず可き諸政黨が、翻て薩長の閥族と結托して、民權の發達を遮斷せんとするの怪事を見るに至りたるなり、民權の名ありて其實なく、形式上の民權ありて實質的の民權なく、法文上の民權ありて活動的の民權なく、而して人民皆な此變態に偷安して、起て其權力を推推して、一世の政治的盜賊を剿滅するの意氣、精神を發現せず、時弊の根本實に此處に在りて存ず、

皇權と民權とは、憲政が依て以て活動するの陰陽二氣なり、憲政の極致は、唯此二氣が完全に調和融化せらるゝ時に於て觀るを得可し、然るに



(四二)

今や此二氣の調和融化を妨ぐるの黨類朝野に充滿し、專横跋扈至らざる所無きに拘はらず、民權は此等の黨類の爲に、翻弄せられ、賣買せられ、毀害せられ、姿奪せらるゝに拘はらず、人民は平然として與り知らざる者の如し。此の如くにして遂に爲す所無くんば、或は黄河の清むを見る可し、憲政の精神を發揚するの一事は永く期す可からざるなり、今日の急務は、唯民權をして完全の發達を遂げしむるに在るのみ、唯民權を暢發して直に九天に達するに在るのみ、唯民權を擴張して皇權と上下首尾全然相抱着せしめ、其間に一物の介在を許さざるに在るのみ、唯民權を活動して朝野の政治的毒物を撲滅するに在るのみ、然り而して後上皇權の天日清和にして下民權の山河秀麗ならんことを期するに在るのみ、根本的改革と云ふ、第二維新の政治と云ふ、亦唯民權を發揮して、現在諸種の政治的賊黨を殄滅し、皇權民權の密着融化を圖るの謂ひのみ、然

(五二)

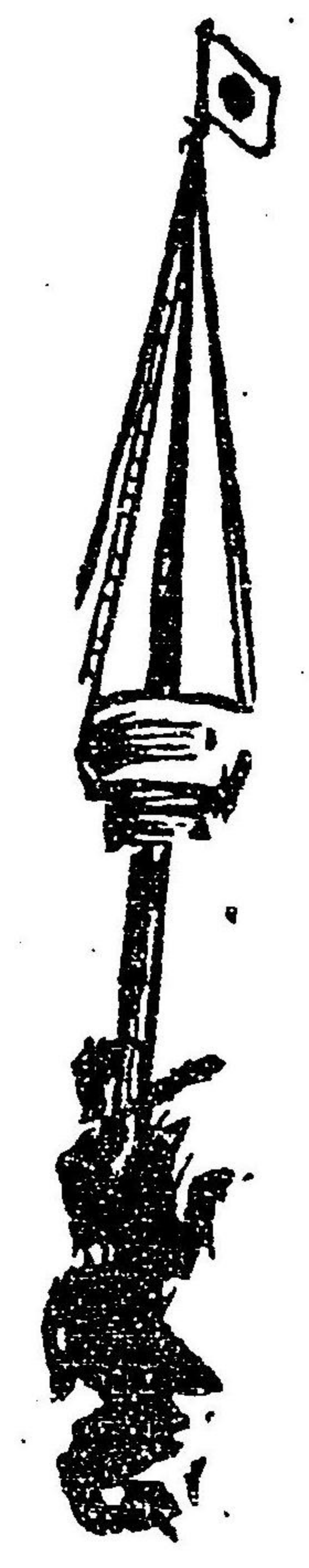
り而して如何にして民權を擴充す可きかと問はる、第一に手を人心の革新に着けざる可からずと答ふるの外無し、人民をして民權の眞意義、眞勢力、眞運命を知覺せしむるは、實に改革、新政の先鋒的事業なり、政治上の改革は先づ人心改革より始めざる可からず、人心一たび改革あり、現在の如き自屈自小の陋風一掃せられ、剛健不息の意氣、精神勃々として動き來らんか、政界の天地自ら一新して、憲政始めて其本然の性質を發揮するに至らん、區々の小手段、小策略は、改革に巨害あるも寸効無きなり、



(六二)

特

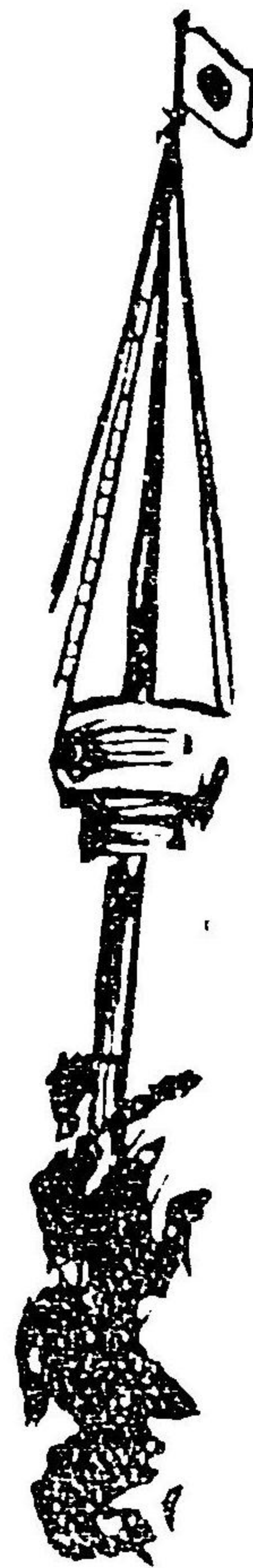
野





時

弊





## 日本前途の危機

一世の人心危途に立つ——未曾有の大厄運！——  
病みしこ雖ども死せるにあらず——消極的對外心  
——積極的對外心——征清役の眞意義——對外的意  
氣の破裂——噛み着きたる大塊肉は消化物なるか  
不消化なるか——國策上不幸なる出來事——大陸  
病——其潜伏期發作期——大陸諸國の患を引受け  
んごす——國策上偉大なる先決問題——盲馬に鞭  
て險崖の上を奔馳す——帝國二重の損害——過大  
の陸軍——陸海兩軍厄介の程度——大陸この平和  
的干繫——大主義の實行



(二)

余輩孰ら當世人心の嚮ふ所を察し、由りて以て帝國の前途を度るに、不穩の情、危懼の念、密雲濃霧の如くに心胸を罩めて、殆ど自ら堪へざらんとするものあり、是れ余輩の思想、風無きに波を憂ひ、煙無きに火を氣遣に因るか、或は帝國の前途、實に危機の横はるあるが爲に然るか、乞ふ余輩をして少しく言ふ所あらしめよ、人心の向ふ所は潮流の如く、國家は潮流に浮べる船舶の如し、國家盛衰興亡の運命は、殆ど全く人心の嚮ふ所の、安路に在ると、危途に由るとの、如何に因りて決せらると云ふも不可ならず、此故に余輩の雙眸、帝國の前途に、ラビリンズあり八陣の圖あり帝國一たび之れに入れば、又容易に其外に出づると能はず、一往一來永く同一の逕路に彷徨して、之が爲に國力を徒費し國利を消耗し、遂に不測の禍害に罹りて、百年の大計を誤らんとするものあるを觀取すると同時に、其の此の如くならんと

(三)

する所以のものは、實に一世人心の相率ゐて邪路危途に向て危奔しつゝあるに因るを知る也、夫れ然り、人心の嚮ふ所は原因なり、帝國の危機は其結果なり、帝國をして其前途に横はるの危機を避けしめんと欲せば、今に於て斷然天下人心の流路を堰き止めて、之をして轉じて他方に嚮はしめざる可からざる也、然れども一世の意向は、其形勢大にして、其力量強く、殆ど何物も當る能はず、何人も遮ざる能はざらんとす、然るを况や、余輩眇々の一身、氣餘りあるも力足らざるの書生を以てして、敢て之に反抗せんと欲するに於てをや、猶ほ細流の水を濺で、焦天の猛火を防がんとするが如し、其功を成すは殆ど得て期す可らざるに似たりと雖も、衷情一片、誠に看すく帝國をして、建國以來未曾有の大厄運に會せしむるに忍びざるものあり、敢て一世の意向に反抗して、苦言諫語する所あらんとする所以なり、然れども今や我社會の多數民人を率ひつ



ある英雄、豪傑、識者、才人等は、酔ひるが如く狂せるが如きの態度を示しながら、既に邪路に踏み込み危途に上り、多数民人は此等案内者の後を追ふて、相共に謳歌、歡呼、心に帝國勃興の快事を豫期して、意氣揚々として進み行くなり、ア、余輩は誰に向てか此心を語らん、余輩の忠言に耳を借す者果して何處にか在る、思へば覺束無きの至りなる哉、ア、天余輩の志を助けて、此將に大なる不幸に逢はんとする國家と民人とを救濟せよ、

徳川時代の人心は、鎖國の堅殻に包まれ、久しく世界の空氣に觸るゝ能はざりしが故に、遂に沈滞して海外に向て迸發するの活氣を失ひたりしも、是れ唯政治制度の弊を受けしものゝみ、外に動くを禁せられしが故に、内に安じて太平を樂みしものゝみ、事無きが故に止むを得ず眠睡せしものゝみ、路なきが故に奔馳せざりしものゝみ、人心は怠れりと雖も

病みにあらず、病みしと雖も死せるにあらず、煙を噴かざりしも火無きにあらず、波を揚げざりしも腐れるにあらず、國民の胸底には、北條時宗の蒙古退治、豊太閤の三韓征伐、天竺徳兵衛の印度貿易、呂宋助左衛門の南洋航海等の壯圖雄略は、夢の如くに活き居たりき、挑太郎の鬼島征伐の話は、代々の小兒に語り傳へられて、暗に海外遠征の勇氣を鼓舞したりき、此故に世界的勢力が東漸して、我が鎖國の堅殻を破壊し、新鮮なる外氣が風の如くに人心を吹拂ふや、久しく鬱屈せし活氣は勃然として振ひ起り、積水の雨を得て遽に堤を破て溢流せんとするが如く、其勢殆ど當る可からざるものあるに至れり、舊習の巖石に堰かれては激して攘夷の暴論となり、開國進取の氣風に導かれては、所謂萬里の波濤を開拓して、廣く智識を宇内に求むるてふ偉觀を示し、或は征韓論の急端となり、或は臺灣征伐の飛泉となり、奔て條約改正談判の山間を



(六)

過ぎ、流れて歐化主義の沼澤に入り、内治改良の平野を浸し、國權擴張の坂路を下る等、看來れば千態萬狀明に其真相を知り難きに似たるも、歴史の山頂に立て下瞰すれば、人心の流脈の向ふ所の那邊に在るかは、何人と雖も認識するを得可し、即ち開國より日清戦争に至るまで、人心の流脈は海外に向ひ世界に向ひ、大に海外に伸び、大に世界に振はんとの一事に向ひ來りしこと斷じて疑ふ可からず、其迂回曲折、時によりて變し處によりて同じからざるは、言ふ迄もなしと雖も、詮し來れば、千態萬狀亦皆な此方向に進み、此目的を遂ひしものならざるは無し、開國既に外よりす、開國以後の帝國史が、殆ど其全部を對外の一事に供するも、亦毫も怪しむに足らざるにあらすや、

然りと雖も開國より日清戦争に至る迄の間は、人心は受動的、消極的に外に向へり、唯外に向へるのみ未だ外を壓せんとするの態度を示す能は

(七)

ざりき、是れ蓋し政体を變革し、社會を改造し、智識を世界に求め、外國の長所を取る等の事業に忙殺せられて、人心は外に向へりと云ふと雖も、内に自ら壓みざる可からざるもの多々なりしが故なり、然れども、一たび外より動かされ、動かされて外に向へ、向ふて外を知りし人心は永く國內に鬱屈するに忍びず、自ら起て外を動かさんと欲するの欲望は何時の間にか、國民の心情に燃ゆるに至れり、日清戦争は取りも直さず、此欲望の迸發したるものゝみ、而して之と共に人心の外に向ふ勢は急變して與動的、積極的となるに及べり、

帝國は何故に清國と戦ひたるかと問はゞ、何人も言下に、清國の暴横を懲らして、朝鮮の獨立を扶くるが爲めなりしと答ふるならん、然り誠に然り、宣戰の詔勅は、取りも直さず此精神を世界に照明したるものなりき、上下官民一致して義戰に勇みたるも、亦之が爲めなりき、然れ共戰



争は國家の大事也、其起るや卒然朝夕の間に在るが如きも、其實多くは然らず、起る可きの因由、事情は豫てより是れ有り、氣勢漸く成り機運漸く熟して、然る後始めて問題に逢着して發動し來る、古今の戦争は概ね此の如くにして起れり、日清戦争豈に獨り然らずと云ふを得んや、余輩は敢て言はん、日清戦争は明治二十七年に起れるものにあらずして遠く日本開國の昔時に起れり、帝國の人心が活世界の活勢に觸れて、國内の太平無事に樂めるより起て、奮て外に向ひ始めたる時に起れり、鎖國の時代に在りても、對外の活氣は未だ全く人心を去るに及ばざりき國を開て世界に見ゆるに至りては、久しく國內に鬱屈したりし人心の、勃然外に向て動き出したるは、余輩既に之を言へり、夫れ一たび外に向て動き出したるの人心は、遂に外に向て加ふる所あるにあらずんば、自ら満足せざらんとするは勢なり、外に向て加ふる所あらんと欲すとは何

の謂ひや、帝國の力を以て他國を壓せんと欲するの謂ひなり、帝國の智を以て他國を凌がんと欲するの謂ひなり、帝國の風尚を以て他國を化せんと欲するの謂ひなり、然るに、我人心は久しく此欲望、即ち外に向て加ふる所あらんと欲するの欲望を遂ぐる能はざりき、開國以來、歐米の文明に風動せられ、諸外國の富強に威歴せられ、常に外より我に加へられたるも、我より外に加へたるは、殆ど是れ無しと云ふも不可ならざるの狀態ありき、國民の胸裡には、不平の念次第に鬱勃たるに至れり、外に向て加ふる所あらんと欲するは、漸くにして其熱度を加ふるに及べり、人心は國內の空氣を息苦しく感じ初めたり、志士は鉄血の間に民心を一振せんと夢みることゝなれり、而して顧みれば、陸海の軍備は未だ全く整はずと雖も、尙ほ持て以て爲すに足るを見る、人心の氣勢此の如くにして、國家の羽翼も亦やと伸び來る、外戦の影は、既に業



日本前途の危機

に此時に於て、帝國の上に現出したるなり、

故に余輩は敢て言はんとす、朝鮮の内亂無かりしとするも、日清戦争は何等かの問題の上に起りしならん、日清戦争は起らざりしとするも、帝國と朝鮮又は他國との戦争は早晚起らざるを得ざりしならん、日清戦争は人心の外に向ふの氣勢に因り、人心が外に向て加ふる所あらんと欲するの欲望に出でたるものにして、朝鮮問題は唯其導火線たるに過ぎず清國の暴横を懲らし、朝鮮の獨立を扶くと云ふが如きは、帝國出師の名分、目的にして、戦争其もの遠因は全く人心外に向ふの潮流に存すること疑ふ可からず、然り而して此人心の潮流にして止まらずば、外戦は清國を相手とするに然らざるに拘はらず、必然之れを試みざる可からざるものは其の勢ひなればなり、

日清戦争は、之を帝國の一方より見れば、實に人心外に向て加ふる所あり

らんと欲するの大潮流より起れり、明治廿七八年の日本は、此大潮流に乗じて世界の大海に乗出さんとしたる船舶たりしのみ、伊藤内閣は此大潮流に順ひ、敢て全速力を以て船体を進めたる船長たりしのみ、國民は始めて窮屈なる内海を離れ、遽に渺茫たる海洋に乗り出で、其到着す可き彼岸の壯觀偉容を想望して、驚喜踴躍措く能はざるの船員たりしのみ人心外に向て加ふる所あらんと欲するの大潮流は、我國家を驅り、我政府を驅り、我國民を驅りたるの大動力なり、夫れ總てのもの皆な此大動力の上に立つ、能く何物か帝國の外戦を妨げ得可き、怪しむ勿れ、清兵未だ朝鮮半島に上陸せざるの時、早く既に戦氣勃然として國人の胸裡に發動し來りたるを、怪しむ勿れ、外交に小心翼々の態ありし政府が、咄嗟の間に開戦の英斷に出でたりしを、怪しむ勿れ、國家非常の大事に會しながら、一個の識者の非戦論を唱ふる者なかりしを、怪しむ勿れ、平

日本前途の危機



(二一)

和を愛すること最も深き良民も、亦敢て干戈を執りて殺伐を事とせんと欲するに至りしを、怪しむ勿れ、平生小事細故によりて嫉視争鬪、互に仇敵の如きの思ひを爲し居たる諸政派が期せざるに相一致して、戦争の煽動者たるに至りしを、戦争の久しき以前より、我人心は國內に蟄伏するに堪はずして、其平生積積の氣を國外に漏らさんと欲し、知らずく遠征、外戦を欲望するに至り居りしにあらざんば、安んず能く急遽の間に此の如きの氣勢を示し得んや、一世の人心が外に向て加ふる所あらんと欲するに至りしは、開國と共に外に向ひは向ひながら、久しく受動的、消極的地位に在りて、外より壓せられ、他より加へられしに對する反動の勢に因る、開國と同時に人心の外に向ひたるは、徳川時代に長く國內に收縮し居りしに反する膨脹の勢に因る、果して然らば、若し一たび歴史の關係より言へば、日清戦争前後に於ける人心の大變動は、實

に少くとも二三年前より積積せる、對外的意氣の破裂せるが爲めなりと云はざる可からず、宜なる哉其勢の猛烈なる、帝國史上其比類を見る能はざることや、

夫れ既に二三百年以來積積せる、對外的意氣の一時に破裂せるなり、其勢の猛烈なりし丈うれ丈、我國人は遠征、外戦の是非、利害を審思熟慮して、然る後に之を實行するの餘裕を有せざりき、國家百年の大計上、止まんと欲して止む可からざるものあるを確信して、然る後に清國と戦ひたる者とは受け取られず、清國の暴横を懲らすと云ふも、懲らして後に如何すべきかとの覺悟を定めたる上の外戦とは思はれず、朝鮮の獨立を扶くと云ふも、何が爲に扶くるかとの疑問を解し得たるが爲めの遠征とは云ふ可からず、國人皆な我兵の鴨綠江北に進入したるの快事に狂喜するも、日本の國策上、兵を亞細亞大陸に出すは、果して何事を意味す

(三一)



日本前途の危機

るかを知る者少きが如し、之を要するに、我人心の状態と日清戦争との  
 關係は猶ほ彼の飢渴者の飲食を擇ばずして之を口にすることが如く、戦争其  
 ものゝ性質如何を問ふに暇あらずして直に之を實行したりし形跡あるを  
 見る、我人心は久しく外に向へり、外に向て加ふる所あらんと欲せり、  
 然れども、未だ曾て一たびも其嗜慾を満たせしことなかりき、清國との  
 衝突に乗じて、直に戦争の大塊肉に噛み着きたるは、其中生外に動くの  
 嗜慾禁す可からざるものありしが爲めのみ、其噛み着きたる大塊肉の消  
 化物なるか不消化物なるか、滋養物なるか毒物なるかを、仔細に吟味す  
 るに及ばざりしは、其情察す可きものありと雖も、日本帝國の危機は、  
 實に此時より動き始めんとせり、  
 人心の外に向ふに至りたるは固より喜ぶ可し、其進んで外に向て加ふる  
 所あらんと欲するに至りたるは更に喜ぶ可し、其發して征清の一舉とな

るに至りたるは、勢海に止むを得ざるに出づ、人は時として怒らざる可  
 からず、怒る可きの事情に當りて、而かも敢へて怒る能ざるは、自尊自  
 重の意氣無きものなり、人の自尊自重の意氣の爲めに怒るや、事の利害  
 勢の是非を顧りみるの暇無きことあり、國も亦た然り、然るがゆゑに、  
 余輩は征清の一舉の、激憤の餘に出でたるものにして、審思の後に生じ  
 たるものにあらず、國策實行の方便として行なはれしものにあらず、百  
 年の大計より割り出たされしものにあらざるのゆゑを以つて、敢へて濫  
 りに其の無謀を咎がむるものにあらず、却つて之れを以て帝國が能く怒  
 る可きに怒りたるの大事實として、世界に誇らんと欲する者なりと雖も  
 之が爲に我人心外に向ふの大潮流が、一瀉千重の勢を以て亞細亞大陸に  
 急奔し去り、帝國今後の盛衰存亡は、唯獨り大陸に於ける成敗利鈍に是  
 れ因るかの如くに信する者、一世の識者を擧げて殆ど皆な然るの状あり

日本前途の危機



勢の赴く所、我國策の基礎を覆さんとなるに至りては、余輩は征清の一舉を以て、我國策上、一の大なる不幸の出来事なりきと云ふに躊躇せず。征清の一舉と共に、我人心は漫然大陸に向て迸り出でたるのみならず、露國等の干渉の爲に、遼東半島を清國に還附するに及んでは、一層強く大陸に噛み着き、一層深く邪路に入り込み、今に及んでは、之を打つも敵くも殆ど其カヒなからんとするに至れり、國人は既に何が爲に海國をイジメたりしかを自ら怪しみ始めたり、新に一の大敵を大陸に見出したるが故なり、此大敵の智術、力量共に清國に優ること萬々、我の全力を盡すも或は其及ばざらんことを恐る、國人は此大敵に對して、忿怒の情火を燃やし立て、不俱戴天の思を日々に増長せんとす、國人は遠からずして更に大陸に戦はざる可からざるに至らんと豫期せり、人心は此一事に向て、洵々然として沸きつゝあり、國人は大陸の一方を凝視するのみ、

更に雙眸を他方に轉ずることなきなり、其狀恰も大陸に於て生死を決せんとする者の如きあり、島國不相應の陸軍擴張は、果して何の爲めなるかと問へ、海國先づ海軍を以て第一の兵備と恃まらずして、何故に却て陸軍を盛にするかと問へ、國人は笑て西方大陸を指すわらんのみ、大陸に領地を有せざれば、東洋の覇權得て争ふ可からずと信する者、大陸に於て勝つは總てに於て勝つ所以にして、大陸に於て敗るゝは、總てに於て敗るゝ所以と信する者、大陸に於てせずんば、世界の諸雄邦に對立する能はずと信する者、大陸に突出するは帝國勃興の上策なりと信する者等朝野の識者を擧げて殆ど是れなり、余輩は此の如きを名けて大陸病と云はんぞす、而して今や此大陸病は、コレラよりも猛烈なるの勢を以て、我人心を襲ひつゝあり、政治家の行く所、政論家の説く所、識者の考ふる所、國民の感ずる所、概ね此病熱に因れる狂勳、譁語、妄想なるに過



ざざるに似たり、是れ豈に容易ならざるの狀態にあらずや、大陸病は今日に發生せるものにあらず、古來我人心に遺傳せる一大熱病なり、其潜伏期に在りては、殆ど其存在を知る能はざるに似たりと雖も、一旦人心興奮して、島國の域外に突出せんとするの勢あるに當りては、病熱忽ち發作して、人心をして酔ひるが如く狂せるが如き狀態あるに至らしむ、我國人は之が爲に、無用の征戰を大陸に試み多大の國力を大陸に徒費したると、古來一再に止まらず、近く當代の初期に於ても、征韓論朝野の間に勃興して、一時殆ど廟堂を動かして、豊公の二舞を演せんとし、幸ふじて識者の盡力によりて、防ぎ得たることありき、世々の英雄豪傑、國內の無事に苦しむに及べば、乃ち國人を率ゐて大陸に出征し以て其遺物の氣を散せんと欲す、而して其目的如何と問へば、時世により人物によりて同じからずと雖も、歴史の証明する所に據れば、要する

は唯散の爲めなりと云ふも不可ならず、然るに、國人は毫も此意味も無く見込も無く勘定も無く、國家百年の長計を誤るの大害をわれ、之を補するの小利たもならんとする大陸侵略の夢想に對して、毫も怪疑の念を懐まざるのみならず、却て其實行を以て霸業成就の大々的手段なりと信するが如し、之を病と云はずして、將た何と名づく可き、トハ云ふもの、國人が視て以て世界と爲せし處、支那、朝鮮、印度等僅に亞細亞大陸の一部分に過ぎず、是より外に更に大なる世界ある可しとは、夢にも知らざりし昔時に在りて、國人の元氣旺盛外に向て溢れ出で、朝鮮を伐ち支那と戦ひたるが如きは、アナガチ酷谷す可きにあらず、寧ろ活氣ある國人の活動として、稱賛するも不可なし、且つ世界の形勢今日と同じからず、國と國との關係殆んど絶無にして、國人が如何に大陸に突出するも、其影響を蒙らざるものは、僅に朝鮮、支那等に過ぎずして



従て我に向ひ来るの反動力も極めて微弱なりし古代に在りては、大陸病も格別の危害を興ふることなかりしが故に、余輩は過去の大陸病を忘れんと欲するのみならず、西郷隆盛時代の征韓論も、伊藤博文時代の支那征討も、人心外に向ふの大勢の致す所として、之を大目に見んと欲する者なり、然りと雖も、日清戦争後に於ける國人が、勝利に乗ずる誇慢と強國の干渉に激せる忿怒との、合して一團となりし情火に逆上して、古來比類なき大陸病を喚び起し、世界の形勢は、全然今と古と同じからざることを、百も承知しながら、唯々事情、行掛りの爲に驅られて、一意亞細亞大陸に爲す所あらんと欲し、大陸あるを知りて其他を知らざるが如く、之が爲に、征清の一舉よりも、更に一層激烈なる變事に會せんとするをも意に介せざるが如く、之が爲に、國力の大半を危途、邪路に徒費せんとするをも顧慮せざるが如く、之が爲に、或は帝國衰亡の端を啓

かんとするにも平氣なるに至りては、余輩は断じて日本の危機近きに在りと叫ばんと欲す、

大陸病の熱魔に攫されたる人心は、何故に帝國の危機を招ぎ致すの恐れあるか、一言すれば、海の日本をして、無理に陸の日本たらしめんと欲するが故なり、海國天然の優勢、長所、權力をメチャクにして、却て大陸諸國の諸患害を引受けんと欲するが故なり、余輩は更に進で苦言痛論する所なかる可からず、

世界に向て爲す所あらんと欲するの日本は、其國策上、偉大なる先決問題をも有す日本は先づ大洋に伸びて、而して後世界に伸びんと闘る可き乎、將た先づ大陸に争ふて、而して後世界に争はんと企つ可き乎、換言すれば、海權の掌握を國策の第一段として、陸權の領有を其第二段とす可き乎、或は陸權の領有よりして、海權の掌握に及ぶを以て國策の



(二二)

順序と爲す可き乎、

更に換言すれば、帝國の世界に對する、先づ英國の爲すが如くするを以て可とする乎、將た先づ露國のなすが如くするを以て是とする乎、

世界の覇權は大洋の勢力に併せて、大陸の勢力を占領する者に歸す、國百年の後、世界の覇權を握らんと雄心あるか、海權、陸權、併せて之を我物にせざる可からざるは言ふ迄もなし、然れども、事に順序あり策に緩急あり、大業は一舉に成す可からざるが故に、先づ大洋の權勢を争はんか、將た先づ大陸の威力を争はんかの先決問題は我國策の上に取り來るなり、此問題は、帝國が世界に向はんとするに當りて、第一に取捨決定せざる可からざるものなり、何となれば、是れ實に帝國に向て、如何の方針を取り、如何の道路に由り、如何の手段に依りて、世界に伸びんと欲するやと問ふものなればなり、即ち旅人に向て其行路を尋ね、

(三二)

將軍に向て其戰略を質し、船長に向て其航路を聽くが如きものなればなり、帝國の世界に向てなす所あらんと志ありて、而かも先づ此問題を決定するの能力無きのみならず、此の如きの先決問題あることさへも知らざるに於ては、是れ盲蛇以て人を嚙まんと欲する者なり、是れ闇中以て物を搜らんと欲する者なり、是れ妄動以て僥倖を得んと欲する者なり、是れ投機以て奇利を攫まんと欲する者なり、幾何か夫れ世界の物笑たらざる、世界の物笑となる尙は可なり、此の如くにして、敢て進て世界に向はんと欲する、忽ち不慮の災厄に觸れて、適を以て國家の獨立を危ふするに至らんなり、今や我人心は偏に亞細亞大陸に向て凝集せり、凝集して他方に迸散する能はざらんとせり、是がために我國力を擧げて亞細亞大陸の權勢競争に消費するを惜まざらんとせり、然り而して、是れ我國策上の先決問題を審思熟慮しての上なるか、我國策の第一手段は、先



づ亞細亞大陸に伸ぶるに在りと確信してのことなるか、先づ海權を掌握して、然る後大陸に向ふは、我國策上大に不利なるものありと断定してのことなるか、

否、否、否、我人心は、國策の如何をも顧みず、國策上の先決問題あるにも氣が着かず、海權、陸權の前後緩急利害得失をも考へず、總て此等の問題をは一足に飛び越えて、ラチも無くワケも無く見込も無く、無暗に大陸に突出したるなり、是れ遺傳的大陸病に惱めるに因るなり、是れ征清の一舉に酔ひるに因る也、是れ遼東還附の變事に狂ひるに因る也、天下の英雄、豪傑、識者、才人等と其後に従ふ國民とを擧げて、盲馬に鞭て險峴の上を奔馳しつゝあり、ア、危哉、日本帝國の運命や、帝國にして其威權既に業に四海に加はりて、世界諸強國の跋扈を抑制するに足り、其餘勢の迸發する處大陸に向て運動せんと欲するに至りしむ

のならば、余輩は我人心の今日の如きあるを怪ます、大陸病猖獗の状あるを憂ひず、國人の漫に大陸に突出せんと思想するを悲ます、何となれば此の如くんば、是れ國勢膨脹の順序を踏み來れるものにして、帝國が世界の覇權を争ふの壯圖あるに於て、勢終に茲に至らざるを得ざるが故なり、

然れども、我國策上の先決問題を確定せずして、直に大陸に向て爲すあらんと欲するは、帝國をして二重の大損害を受けしむる所以なるを知らざる可からず、人心偏に大陸に向ふが故に、海權掌握の大業は自ら一世の輕視冷待する所となり、看す、他の強國をして、太平洋の覇權を得せしめんとするは、帝國の大損害なり、人心如何に大陸に熱中するも、四面環海の帝國は、其天然の地勢上、大陸に於ける國家的競争の優勝者たるに容易ならず、假令優勝者たるを得るの見込ありとするも、之が爲に



日本國家の危機

國力の大部を消費するにあらずんば志を成すを得ず、島國の急務を擱き、敢て多大の國力を惜まらずして、之を島國の急務と云ふ可からざる、大陸の國家的競争に用ゐんと欲す、果して何等の必要ありて然るか、余輩の遂に解する能はざる所なり、而して是れ亦帝國の大損害を致さんとするものにあらずや、

帝國をして三重の損害を受けしめんとするも、尙忍び得可しとするか、人心漫に大陸に聚集するの結果は、終に帝國をして歐洲大陸諸國の病患に感染せしめずんば止まざらん、是れ余輩が想ふて痛心に堪はざる所なり、歐洲大陸諸國の病患とは何ぞや、陸軍擴張の大競争是れなり、看すや、歐洲の大陸諸國は、其過太の陸軍の爲に、將に顛覆の奇禍に罹らんとするの状況あるを、陸軍の擴張は、多數の壯丁が他人の勞力に依頼して奉養するを意味し、社會生産力の減少を意味し、國費の増加を意

味し、國民負擔の重大を意味し、貧民の繁殖を意味し、社會黨の發生を意味し、無政府黨の勃興を意味す、現時の歐洲諸國は實に之が爲に苦惱煩悶殆ど措く能はざる者の如く、佛蘭西大革命以來の大震動が、之よりして起り來らずやとは、識者の早くも憂慮する所なり、其陸軍たると其海軍たるとを問はず、軍備擴張の大競争は、世界各國の齊しく苦む所なりと云ふと雖も、其厄介の程度を論ずれば、陸軍遙に海軍に優る、陸軍は海軍に比して多數の壯丁を要し、陸軍は海軍に比して、平時の利用頗る少し、此故に陸軍擴張の大競争を試みざる可からざるの地位に在る邦國は、其必要無き邦國に比して、甚しく不幸なりと云はざる可からず、日本は海國なり、海軍擴張の必要こそ多けれ、陸軍擴張の必要は寧ろ頗る少きの地位に在り、然るにも拘はらず、今や陸軍擴張の爲に費すの國力、海軍擴張の爲に費やすの國力よりも寧ろ多からんとするの事實を



日本朝廷の痛癢

見る、是れ豈に帝國が歐洲大陸諸國の病患に感染し始めたるが故にあら  
 ずや、而して其因りて起る所は、人心の大陸に濫出せんと欲するに在り  
 とせば、余輩の情に切に語に急なる、實に止むを得ざるに出づ、  
 余輩は、之を帝國天然の位地に看、之を他の海國の歴史に鑑み、之を國  
 力膨脹の順序に考て、之を世界の形勢に察し、之を帝國の雄圖に慮り、  
 我人心の先づ大洋に向て伸張せんとを冀ひ我帝國の先づ東洋の海權を掌  
 握し、更に進で太平洋の海權を掌握し終ひに世界の海權を掌握せんこと  
 を期して一意猛進せんことを祈る、  
 余輩は、海權掌握を以て、日本當代の精神となさんことを冀ひ、之を以  
 て我外交を貫き、我軍備を貫き、我商工業を貫き、我教育を貫き、我人  
 心を貫きて、我國策を貫き、一世を擧げ、國人の智勇を竭して、以て此  
 大主義の實行に力めんことを祈る、

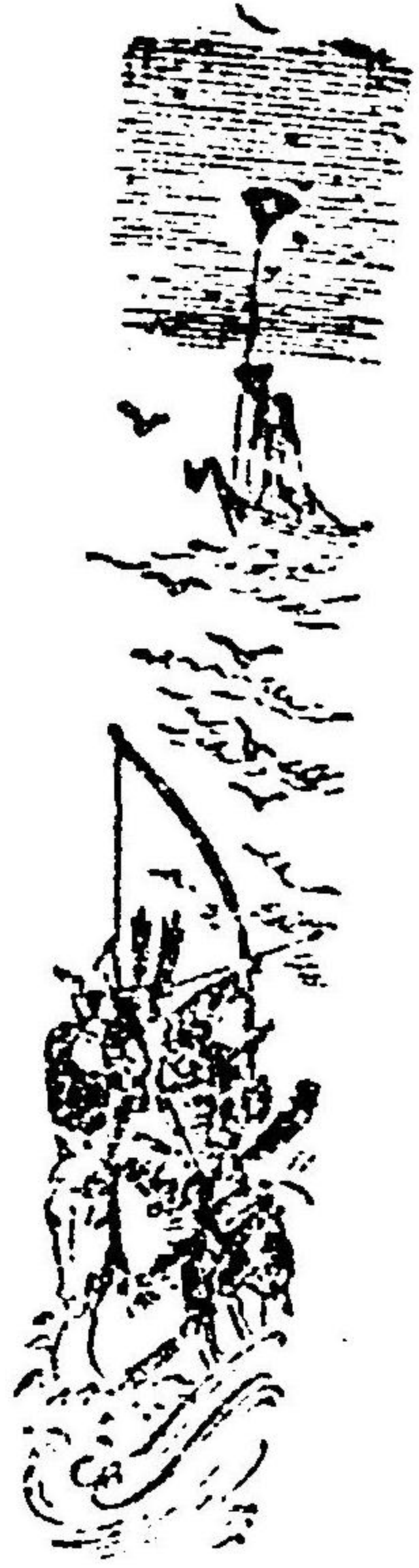
余輩は、帝國の亞細亞大陸に對する、唯勉めて通商交情等の平和的擴張  
 を厚ふせんことを冀ひ、強て大陸に向て政治的、武力的の權勢を擴張せ  
 んことを圖り、之が爲に海國を以てして、却て大陸諸國の間に蟠まれる  
 禍機亂源に觸着して、好て我國力を無用有實の地に徒費し、不慮の危機  
 を踏まざる可からざるが如きこと是れなからんことを祈る、  
 余輩は、帝國の威權の朝鮮に振はざるを悲じよりも、寧ろ我國勢の大洋  
 に向て擴張せざるを悲まんとし、帝國の武力の支那の頑冥を啓發するに  
 足らず、露西亞の野心を防禦する能はざるを憤るよりも、寧ろ我國人の  
 萬里の波濤を開拓して、雄心を四海に伸ぶるの意氣無さを憤らんとし、  
 極端を言へば、余輩は亞細亞東部の形勢如何に變動し、何者が大陸の霸  
 權を握るも、帝國にして海權掌握の偉業を成し遂げ得るに於ては、之を  
 冷眼に看過して羨まざると備する者なり、余輩は、帝國にして先づ大洋

日本朝廷の痛癢









## 人物經濟

人類の大洋 || 至大の生物絶類の活体 || 社會の  
波打ちざわ || スフィンクスの謎語 || 春野の若  
駒 || 人生の解纜 || 社會の壓制 || 才子とは社會  
に其身を賣り渡したる一種の奴隸 || 暴君の性を  
知らざる可からず || 我先づ社會を容る || 誤解  
の爲に斃る

社會は人類の大洋なり、眇たる一身、遽然之に臨めば、心は浩々渺々、  
無際涯、不可言の大觀に打たれて、惘然自失、是れ有、是れ無、是れ實  
是れ虚、是れ生、是れ死、是れ覺、是れ夢なるや否やを思料する能はざ



(二)

るものゝ如し、然れども、目に映するの波瀾に於て、其運動を見るのみならず、耳を衝くの濤聲に於て、其呼吸を聞くのみならず、風恬浪坦、一碧萬頃、白鷗と戯れ、錦鱗と遊び、雲影に笑ふの佳景に於て、其容與の和氣に感ず可く、陰雲下壓、黒風横撃、怒濤天を拊ち、狂瀾地を噛み舟を壊ち人を殺すの魔狀に於て、其畏る可きの憤怒を知る可し、自然界の大洋尙ほ斯の如し、人類の大洋たる社會に至りては、其五感あり、其七情あり、其意思、氣習あり、其運動、呼吸あり、其榮枯盛衰あり、其大の生物、絶類の活体なりと言はざる可からず、

自然界の大洋が、能く物を容れ能く物を破るが如く、社會は能く人を活し能く人を殺す、海濱を搜れば諸物の屍骸の狼藉たるを見る、半片の魚骨、一箇の貝殻、皆是大洋殺氣の痕跡なるのみならず、時としては、人の雄志を乗せたる大船の破片もある可し、猶是春閨夢裡の人たる才子の殘骨

(三)

もある可し、嘗て紅顔を郎の前に掩ひし美人の片袖もある可し、風波に驅られて磯邊に打揚げられたる千種萬様の物、多くは是れ、大洋の怒に觸れたるものゝカタミならざるなし、願みて社會即ち人類の大洋の波打際を見よ、此處にも亦涙の種多し、或は社會に在りて、社會の感情、意思、氣習を知らざりしが爲に、或は箇人として余りに卓落不羈の意氣に富みたりしか爲に、或は社會に先て動き、社會の知らざる所を説きしが爲に、或は社會を冷笑熱罵せしが爲に、或は社會を忌み避けんと欲したりしが爲に、或は社會の愚なるよりも愚なりしが爲に、或は社會を欺かんと計りしが爲に、或は社會を破らんとするの云爲を示せしが爲に、社會の機嫌を損じ、其の冷遇する所となり、其打撃する所となり、或は既に窮死して耻辱を沙上に留むる者あり、或は淘去淘來の荒波に揉まれて半死半生の者あり、或は怨を吞で堅忍する者あり、或は苦痛に堪へずし



(四)

て哀を呼ぶ者あり、滿目の凄氣慘狀、實に仁人俠士をして、胸を拊て大息せしむるものあるにあらずや、

邪惡の賊人が、社會の激怒に觸れ、其嚴罰を蒙むるを見るも、怪しむに足らざれども、社會の大洋の波打際に打揚げられて、窮死の境にモガキつゝある者の中には、高潔なる正人君子あり、天生の傑物あり眞理と情死するを厭はざる學者あり、活火胸懷に炎々たる詩人あり、奇才縦横の事業家あり、高見卓識の評論家あり、靈氣指端に迸るの畫家、彫刻家あり、千種萬類、枚擧す可からず、而して多くは是れ、異常の天性、異常の能力、異常の操行ある者なり、ア、社會は、何故に斯の如き人物を虐待する乎、斯の如き人物は、何故に社會と相容れざる乎、是れ實に、スフィンクスの謎の如き難解問題なり、

人生れて、慈母の胸と膝との天地に棲む間は、殆ど是れ人間のものにわ

(五)

らず、嬰兒の一笑、心あるが如く心なきが如く、何處より來り何處に去るを知らず、春風の温和、花氣の芬芳、以て比するに足らず、慶雲の輕浮、明月の清輝、以て較するに足らず、名狀す可からざるの處に、無限の神味あり、之に對すれば、惡魔も亦其力を失はんとす、稍や長じて、家庭の乾坤に遊ぶ、一動一靜皆自然を離れず、山自ら蒼々水自ら青々、鳥の如く謳ひ、花の如く笑ふ、更に進んで學校生涯に入るも、猶は芳草千里の春野に馳驅する若駒の如く、不羈快活、唯前代の聖賢豪傑を懷ふて、未來の功名事業を夢みるのみ、人は未だ社會即ち人類の大洋に浮ばず、尙ほ其桃花流水自然の風光に富める故郷を去らず、智愚勇怯の差別は、或は遺傳の感化により、或は家庭の感化により、或は學校の感化によりて、固より一樣なる能はずと雖も、然れども皆な多く本來の面目を保ち、意に従て動き興に乗じて樂むの自由を有し、未だ人生



(六)

風波の如何を知らざるなり、

然れども人は永く此境界に留まるを得ず、早晚社會即ち人類の大洋に乗出さざる可からず、身は何時しか故郷の山河に別れ、煙波渺茫、親しむ可きが如く、畏る可きが如き大洋の濱に来る、眼界一變、四顧悉く看來の風物と同じからず、心情亦豈に驚動せざるを得んや、茲に於て、智勇なりし者、必らずしも智勇なるを得ず、愚怯なりし者、必ずしも愚怯ならず、或者は順風に帆を揚げて進まんとし、或者は波瀾に従て浮沈するの安全なるを知り、或者は一身を挺して風濤の險惡を凌がんと欲し、或者は他人の力に頼りて無事ならんことを期し、或者は日和を見て躊躇し或者は風潮を顧みずして助かんとし、或者は直進せんとし、或者は迂回せんとし、思ひ／＼に人類の大洋を航せんと計る、而して其成敗得失果して如何、他年一日、寄せては返へず荒波の濱邊を歩して社會の風波に

追ひまぐられ、其處に打揚げられたる者の少なからざるを見れば、斯くして乗り出でたる人々の中に、覆没の不幸に會したる者の、多からざるにあらざるを知るに足る、

覆没の不幸に會せずして、巧みに社會の海面を航し行く者と雖も、仔細に其心情を檢し來れば、實に其變化の甚だしきに驚かざるを得ず、曾て慈母の懷に在りて、天使の如く清く愛らしかりしもの、今は貪婪飽く無き豺狼の如き者となれり、曾て父母兄弟の間に在りて、一家の光輝たりし者、今は俗氣滿面見るも厭ふ可き者となれり、曾て學校に於て、光風霽月の如くに快活なりし者、今は偏僻固陋無孔笛沒絃琴の者となれり、是れ何故や、人類の大洋は風波險惡、社會は容易に箇人本來の性情を容れざるが爲に、人々皆な飽くまで辛酸を嘗めたるに因るにあらずや、好運の者にして尙ほ斯の如し、彼の覆没の不幸に會したる者、即ち社會

(七)



(八)

に排斥せられたる者の、苦戦は如何なりし乎、而して此等の人は何の欠くる所ありて、遂に人類の大洋の濱邊に打揚げられたる乎、斯る不幸者は、如何なる性情の人に多き乎、如何なる目的の人に多き乎、如何なる言行の人に多き乎、

余輩は、世々代々、幾多異常の人物が、社會に見捨てられ社會を見捨て其非凡の心情を濟人經國の事業の上に煥發する能はずして、輾轉淪落の慘境に窮死すること、猶ほ彼の深山の佳樹良木の、遂に人の用たらずして、空しく妬雨嫉風の裡に朽ち果つるが如きを見て、以て人物經濟の法を得ざるものと爲し、之が爲に社會の損失の莫大なるを想ひ、且つ儲人天與の能力を徒費するの無上の恨事なるを想ひ、未だ曾て天を仰て浩嘆せずんばあらざるなり、

人物經濟の法を得ざる、社會其罪あり、個人亦た其過なきにあらず、乞

(九)

ふ先つ社會の大壓制者なるを看取せよ、滿清朝廷が、支那人の頭髮をして豚尾的のものたらしめたる壓制を見て笑ふものゝ如きは、社會の壓制の、更に奇細なるを知らざるなり、誕生の儀式より葬送の儀式に至る迄お早ふの挨拶よりお休みの挨拶に至る迄、且より夕まで、生より死まで時々刻々、事々物々、社會は其熊鷹の如き目を見張て、人の言行を監視し、苟くも其意に従はざる者あれば、或は之を嘲笑し、或は之を擯斥し或は之を牢獄に投じ、或は之を絞首臺に上ぐ、人は裸体にして生れたり故に裸体即ち天真なりとて、赤條々の態にて市井を徘徊する者あらんか社會は之を狂人と罵り、又は已れを辱かしむる痴者と怒り、決して其儘には差措かざるなり、衣服の体裁の如き、縞柄の如き、如何でもよさうのものなり、然れども、社會は此邊の世話までもやき、飛び離れたる服装を爲す者あれば、偏人と嘲けるに躊躇せず、男にして女装し、女に



して男裝する如き好事者あれば、忽ち警官の厄介となるを免かれず、絶世の美人ありと雖も、社會の流行なるものに從て、其髪を飾り、其顔を彩り、其衣を飾り、其日傘、其木履、總て時様を學び、所謂五分も隙かない装を爲すのみならず、其目のつかひ方、其笑ひ方、其歩み方に至る迄、社會の好む所に出づるにあらざれば、社會は美人とし許すを欲せざるなり、故に俗流の所謂美人なるものは心ありと雖も、自己の好む所を行ふ能はず、身ありと雖も、自己の想ふが如くに装ふ能はず、一枝の花簪、一點の口紅、皆な社會の指圖に從はざる可からず、即ち活ける人類と云ふよりも、寧ろ社會に操らるゝ人形と許す可きものなり、俗流の所謂才子とは何者ぞや、才子なるものは社會に其身を賣り渡したる一種の奴隸なり、亞非利加産の黒奴は、牛馬の如く鞭撻せられ、牛馬の如く飼養せらるゝ、才子と名づけらるゝ動物は、社會と云へる暴君の左右に侍し

其機嫌を取り、其足腰を揉み、其髭の塵を拂ふの故を以て、猫の如くに寵せられ、養はれんことを望むものなり、而して其奴隸たるや黒奴と選ぶ所なし、彼等は書を讀む、社會に詣はんか爲に書を讀むなり、彼等は道を講ず、社會に悦ばれんが爲に道を講ずるなり、或は香、花、茶、碁、碁、玉突、大弓、音樂等を學ぶ、皆な自ら樂む所以にあらざして、社會に見てもらひ聞てもらはんが爲めなるのみ、彼等は獨り自ら正ふするを欲せず、社會の目の前に於てのみ正ふせんと欲す、社會の耳目の届かざる處に於ては、敢て卑劣汚穢の言行に耽りて耻ぢざるなり、俗流の所謂才子なる者は、實に頭頂より足尖に至る迄、外貌より心の奥に至る迄、社會壓制の力に全く屈服したる個人の標本にして、所謂才子なる者の言行を見れば、社會の壓制の如何を測量し得可し、娼婦は卑む可し、然れども娼婦は身を賣りて、而して必ずしも心までも人に賣らず、所謂才子



(二一)

なる者は必身共に社會に賣りて耻ぢず、其卑む可き娼婦に越ゆと言ふ可らずや、

所謂才子なる者を論評して、筆鋒覺ゆる岐路に奔りたるが如きも、余輩は之によりて、社會壓制の反証を示さんと欲するのみ、社會は一種の暴君なり、暴君の常として、服従せざる者には、過酷の待遇を與ふると同時に、服従する者には安全の保護を與へんとす、故に世間の滔々者流即ち大多數の人々は、知らずく此暴君治下の順民となり、壓制を受けつゝ壓制の苦痛を忘るゝ者の如し、獨り奈何せん、生れて吞牛の剛氣あり不羈奔放、尋常の軌範を脱し、世俗の禮法を度外視し、意に従て天馬行空の活動を爲さんと欲する異常の人物は、唯々諾々社會の壓制的命令に屈服する能はずして、一身却て社會を動かさんと計るに至る、斯くて成功せし者は、社會の崇拜する英雄豪傑なり、失敗したる者は、社會の冷

待排斥する幾多無名の英雄豪傑なり、齊しく是れ英雄豪傑にして、其運命に於て、斯の如き大差違ある所以のものは何ぞや、余輩乞ふ更に進で論ずる所あらん、

其性を知れば、人は水蒸氣を捕捉し、雷電を驅使して、之を諸般の實用に供するを得、當代の所謂物質的文明なるものゝ異彩は、實に人が自然の性を看破し、之を利用するの處に存するにあらざるや、苟くも其性を知れば、猛獸毒蛇をして、人の意に従はしむるも亦難きにあらず、況んや人の同情に成れる社會に於てをや、社會は一種の暴君なり、然れども、其性を知りて而して進み干かす者あれば、茅屋の賤民と雖も、懟て之を迎ふるのみならず、若し其進み干かす者にして、偉大の人物なるに於ては、之を救世主の如くに尊崇し、其命令に服し、其訓教に遵ひ、其需求に應じ、隨喜渴仰、又他事を顧みるの暇なき者の如し、此故に社會に成

(三一)



功する者は、皆な社會の性を知り、社會の性の趨く所を知り、由りて以て、或は自己の僻性を矯め、或は社會の弊習を戒め、或は社會に薰陶せられ、或は社會を感化し、社會と相對して、就かず離れざるの妙境に至れるものなり、天空海淵の度量を以て、社會我を容れざるも、我先づ社會を容れ、時の社會に知られざるも、後世の社會に知らるゝを望み、從容として天理人道を説きたる者は、聖人君子にあらずや、深遠の智見、剛健の意氣、能く散漫亂離の人心を統合し、能く姑息偷安の社會を警醒し、勢に乗じて大事を成したるものは、英雄豪傑にあらずや、其他一技一能の士に至るまで苟くも社會に成功せしものゝ迹に觀れば、何れも先づ社會と相凌轢衝突して、而して遂に社會をして我を知らしめ、我をして社會を知らしめ、社會の性に據りて、而して我の性を煥發したるの妙作用に出たるものならざるはなし、

奇材異能ありて、而して數奇不遇に終るの士は乃ち然らず、剛猛の意氣社會の氣習と衝突するや、我先づ怒りて社會も怒り、反撥して相容るゝ能はず、社會の性未だ我に明かならずして、我は社會を見捨てんと欲し、我の性未だ社會に明かならずして、社會は我を見捨てんと欲し、互に誤解するの結果は、互に相傷害するに至る、誤解の爲に、社會に虐待、屠殺せられたる正人、君子、奇材異能の人は、古來幾千萬人か、必ずしも、陳蔡の野に餓れたる孔子、十字架上に死したる耶蘇、毒杯に斃れたるソクラテスを擧ぐるに及ばず、余輩は近く明治の歴史に於て多くの事例を見るを得可し、誤解の爲に、世を憤り、時を怨み、社會を地獄の如くに想ひ、俗人を惡魔の如くに感じ、或は不平の氣に悶死し、或は自殺し、或は自暴自棄して酒色に耽溺し、或は異郷に避け、或は山野に遁れ、英豪の天資を抱て、空しく狗鼠の如く死し去りたる者は、右來幾千萬人



予、歴史のページを繰返へすに及ばず、現に余輩の知人中に見るも、斯  
 の如き者少なからざるなり、  
 一人の力、時に國家の興亡、人心の隆汚に關す、人物經濟の法を知らずし  
 て、幾多の人材を消磨し去るの社會、豈に其罪無しとせんや、然れども  
 人も亦盡さる所あり、余輩の實に深慨して特に言ふ所ある所以なり、  
 如何にして遺賢棄材無きを期すべきやは、余輩乞ふ他日編を更めて論ず  
 る所あらん、

# 遠征なる哉

## 遠征の時代遠征の世界

春とは云へど風寒き、新潟港の夜更けて、燈火揺らぐ海の音に、孤影寂  
 々獨り眠らず、思を紛々たる小政治戰場より轉じて、心を茫々たる大地  
 球上に馳すれば、實に此の瞬間は生活を天涯地角に需め、利益を熱天凍  
 地に探り、權勢を瘴煙蠻雨の間に占めんと欲する幾多豪壯なる白皙人種  
 幾多忍耐なる支那の黄色人種等が、或は波に暮らして波に且かす船の上  
 或は雲を出で、雲に入る車の裡に、俯しては懐かしき故郷の漸く遠きを



遠征なる説

(二)

悲しみ、仰では頼もしき客土の日に近きを喜び、満胸の感慨を浩歌と酒杯によりて漏らすの時ならん、ア、今の世界は、生活競争、人類衝突、優存劣滅の世界なり、今の時代は智力戦闘、利権軋轢、強食弱肉の時代なり、遠征茲に於てか止む可からず、爲さざる可からず、今や即ち遠征の時代、遠征の世界なるなり、彼の煖かきは方尺余の炬燵、甘きは一合半の寢酒、浮世を狭苦しく小島の春秋に送らんとする國民は、此の世界此の時代を果して如何と視るか、諸君乞ふ我輩をして、小政治戦場の常套語外に言を盡しめよ、

人は社交の動物なりと雖も、其數過少なれば力薄く用足らずして氣候、風土、動植等外箇の迫害に堪ゆる能はず、其數過多なれば、土地、食物生計等箇々相歴し人々相争ふ、抱合、分離の二作用之を以て人類の間に絶へずして、而して此の二作用は遠征に依て行はる、遠征は即ち大地球

(三)

上に人類の配布を適當にし、其生存を安易にするの手段なり、此の故に人生何の時か何の處か、抱合なからん、分離なからん、遠征なからん、世界の歴史は人類社會の抱合、分離、即ち遠征の歴史なりと言ふも不可なきなり、近世の歴史家は論ず、世界の文明上歴史的人種と稱すべきはコーカシアンスなり、コーカシアン人種中、進歩的民族はアリアンスなり、而して世界の文明上最も有力有功なりしアリアン民族は、如何なる者なりしかと問はば、最も活潑に人類社會の抱合、分離を試み、最も壯快に遠征を行ひたる民族なりしなり、同じコーカシアン人種中、ハミチック民族は亞非利加の北岸、地中海邊に一たび輝きたれども、遂に其處に屈して又伸びず、セミチック民族は嘗て幽妙の心情を現はしたることあるに係はらず、地中海、紅海、ペルシャ灣三水の間に朽ち果てたるに、獨りアリアン民族のみは亞細亞に起て歐羅巴に動き、發して華

遠征なる説



遠征なる説

(四)

麗なる 그리스、文明となり、峙て壯嚴なるローマ文明となり、開て偉大なる歐羅巴文明となり、近世に至りては其銳氣大西洋を飛過して亞米利加大陸の南北に入り、更に太平洋を横截して亞細亞大陸の前後を襲ひ、南北洋を窮めて今や到らざるの地なからんとす、其抱合、分離の作用活潑壯快なる此の如くにして、而して後有名なる第十九世紀の文明を煥發し得たりとすれば、文明と遠征とは或は原因となり、或は結果となり、密着して離れざるの關係ありと斷言せざる可からず、一步を進めて論ずれば、第十九世紀の文明は最近の文明なり、寧ろ第十九世紀下半期の文明なり、其の大半は蒸氣、電氣、器械、理化學、鐵、石炭等の方に因りて起りたるの文明なり、而して此等の力は多くは遠征の事後を利せんが爲に現はれ來りたるが如くなれば、茲に至て寧ろ遠征は文明の一大誘導者、一大開發者なりと言ふの當れるに如かざるなり。

(五)

試みに、我島國の小乾坤に、英雄豪傑一起一仆蝸牛角上の争鬪止む時なかりし間に、彼れアリアン民族が、如何に豪懷を萬里に馳せて、孤帆鯨濤蛟波に飛び、一劍虎鬪獅窟を衝くの遠征を始めたるかを見よ、千古の偉丈夫コロンブスが、其足初めて西印度サン、サルワドル島の地を踏みたるは、我神武紀元二千百五十二年の十月十二日にして、伊勢新九郎長氏が火牛を函嶺に驅つて小田原城を取りたるは、同五十四年なりし、豪膽兒ワスコ、ダ、ガマの探檢船か、亞非利加の南端好望海角を廻りて初めて印度航海を開きたるは、同五十八年長氏の兵鋒漸く關東を壓せんとするの時なりし、英國の船將カボットがニュー、ファウンドランド島に航して英領亞米利加の基を開らきたるは、同五十七年なりし、西班牙のバルボアが米大陸を横ざりて初めて太平洋の煙波を見たるは、同七十三年足利義植が六角定頼を伐て敗還したる年なりし、海上の健兒マゼル



遠征なる説

(六)

ランがマゼラン海峡を航過して大洋に乗り込みたるは、同八十年北條早雲卒したる翌年、其の船地球一周の大功を派したるは、同八十二年なりし、有名の硬漢コルテズが墨其哥を征服したるは、同八十一年足利義晴將軍に任せられたる年なりし、猛勇なるデ、ソトがミスシツビー大河を發見したるは、同二百一年毛利元就が尼子晴久を敗りたる年なりしなり、其後五六十年、南北亞米利加に於ける遠征日に進歩して、勢力日に擴大し來りたる事實は之を略し、眼を亞細亞に轉すれば、有名なる英人の東印度會社は、同二百六十年關原合戦の年に設立せられ、クライブ、ヘスチングス等が後日印度五天竺を蹂躪滅亡するの緒を開きたり同七十一年、加藤清正卒したるの年は荷蘭日本と通商を開き、其翌々年には荷蘭、英吉利、佛蘭西等支那と通商を始めたりし、荷蘭人が印度洋島にバタビヤ府を創立したるは、同八十一年徳川秀忠の治世なりしなり、其後

(七)

百餘年、英國の船將クック、バイロン等が南洋群島に遠征を試みたるは同四百三十年前後の事なりしなり、近世に至ては遠征愈々廣く益す進み同五百十二年即ちペルリ浦賀來航の頃にはドクトル、ケーンは氷雪を衝て北極を去る僅に五百十九英里の處迄遠征し、マクリエール氏其他の人々も北氷洋の航路を發見せんと遠征したること屢なりしなり、其後數年雷名ある英人ダビット、リヴィングストンは、殆んど亞非利加の三分の一を探檢し、近年エシン、バツシヤ救援を以て世界に知れたるヘンリー・エム、スタンレーは、リウイングストンを追ふて此の暗陸に衝入りたる事實は更に言ふに及ばず、此の如く四百年來のアリアン民族は、遠征探檢、移住、殖民、新建國に心身を捧げて、地球表面を横行し、電信、汽船、汽車等、諸般此の運動に欠く可からざる發明利用從て隆興し、新文明燦爛として世界に輝くに至りたるを見れば、正に今の世界は遠征的

遠征なる説



## 遠征なる説

世界、今の時代は遠征的時代、今の文明は遠征的文明なるを明知すべきなり、

## 埋骨青山到處多

近世の遠征は、其の性質抱合的に非ずして分離的なり、舊世界に於ては或は人口増加力は生産増加力と平衡を得ずして衣食の欠乏に苦む者漸く多くなり、或は近世文明の一大弊竇として富は山と高く海と深きも、其の分配次第に偏して、膨脹する者は益す膨脹し、收縮する者は愈よ收縮して、少數の富豪者と多數の窮貧者とを生じ、一轉して少數富豪者の壓制となり、多數窮貧者の不平となり、社會の平和日に危ふからんとするあり、其の他諸般の事情あり、舊世界の社會は成熟の期を過ぎて、腐敗の期に入らんとする狀勢現然たるに至ては、止む可からざる必要として

分離的遠征を新世界に向てなさざる可からず、茲に於てか洶湧澎湃たる遠征者の大潮流は一瀉千萬里の勢を以て野蠻人の樂園に注入し、其の奇幻なる歌謡を反響したりし青山綠水は鐵路に毀たれ、煤煙に汚され、其の神聖なる祖先の墳墓は、牛羊の牧場となり、其の孤立的生活は攪亂せられ、其の野蠻的自由は侵害せられ、來客は主人となり、主人は奴隸となり、其の生殖力は衰亡し、遂に神經質の論者をして、今の世界は劣等人種滅却の期運に際會せりと悲憤せしむるに至れり、試に、最も冒險の勇氣熾なる英國人が、昨年中(明治廿四年)諸外國に遠征したる者幾何なるかを見るに、其の總數三十三萬四千四百五十一人にして、之れを一昨年(明治廿三年)に於ける三十一萬五千九百八十人に比すれば、一萬八千四百七十一人を増したり、而して之を數別すれば左の如し、



遠征なる説

往住國	英蘭人	蘇格蘭人	愛蘭人	其他
北米合衆國	八七、五七 <sup>八</sup>	一五、四七 <sup>八</sup>	五、三九 <sup>八</sup>	九、五七 <sup>八</sup>
英領北亞米利加	一七、九三	二、三九	一、三六	三、二六
濠洲	一四、三五	二、四九	二、四七	四三
南亞非利加	八、五八	四四	一〇一	一、五九
其他諸國	九、三三	一、五七	一、〇三	六、三三
計	一三七、六八	三三、三二	五、三九	一六、一八

單に英國人のみにても年々三十余萬の遠征者あり、之に佛、獨、西、葡、澳、支那等諸國よりする遠征者を加ふれば、想ふに年々一百萬に近き者は、幾久しくも住馴れし故郷の空を後にして、知らぬ他國に苦勞して、新に生活を需め土地を拓き社會を結び國家を建てんとて天涯地角に向て出立するなり、横濱、長崎に遊びて入港する遠洋航海の汽船毎に、數百

千の支那遠征者を載せ來らざるなきを見るも、今の地球表面には、時々刻々人類の配布をして其の當を得せしめんとする作用、即ち人口過多生活苦難の舊世界より、未開の新天地に移轉する遠征の行はれ居るに想ひ到る可し、而して是れ自然必至の勢より起る、遠征豈に瞬時も止む可けんや、

蝸牛的蝨居を小乾坤に貪りて、大塊上の山河を見る能はざる者は知らざる可きも、骨を埋ひるの青山は至る處に多く、遠征、探檢、移住、殖民新建國を試むるの天地は茫漠窮む可からざるなり、彼の北米合衆國の如きは全世界の遠征地、年々幾十萬人を吸收して六千萬の人口多からずとなさず、然れども其面積の廣さに割當てれば、一方里僅に三百人近くを容るゝに過ぎず、存て或人の説を聞くに、全合衆國民を驅りて之を其の最大なる一州に詰め込むも、其の人口の密度尙は日本に及ばざる可しと

遠征なる説



云ふ、其天空海淵の度量は、此の後幾千萬の移住者を容れて餘裕あるを知る可し、その他英領カナダあり、土地廣く人少く限りなきの富源は遠征者の開拓に任ず、更に南亞米利加を見れば、其のブラジルの如きは、殆んど北米合衆國と其の面積を同ふするの大國にして、其の人口は僅に千二百萬前後に過ぎず、海岸一帯白哲人種の經營あるも、内地は未だ遠征者の開拓を受けず、醇葱たる森林數百里に連りて、曠濶なる平原天と接し、空しく天然の儘に委棄するものあり、其他ウルグアイの如き、アイジエンチン共和國の如き、孰れも數百千萬の人口を容るゝに足らざるはなし、南北亞米利加の兩洲に就て見るも此の如くなるに、更に亞非利加大陸あり、更に亞細亞大陸あり、其のサイベリヤの如きは、確に將來地球の諸方より數千萬の人口を呼び寄するの地たり、更に濠洲及び南洋群島あり、アングロ、サクソン民族の如きは、既に其の殖民地を變じて

獨立の新國家を南半球に建てんとすの計畫に着手せり、地球表面の一半は社會成熟の期を過ぎて腐敗の期に達せんとするに、其の一半は寂寞無人の有様あること此の如し、遠征者の潮流が此の一半に向て注射するは止む可からざるの勢なるなり、而して我國人は此の遠征的時代遠征的世界に立て果して如何せんとするか、

### 探檢的遠征を先鋒ごせよ

陳腐なり、業癩なり、今更我國人に向て海外に移住殖民せざる可からざる理由を詳論するは、我人口は既に四千萬を超過し、年々五十萬人弱の増殖あり、土地狭く人多く、北海道琉球を除きて算すれば、面積一萬八千餘方里一方里の人口凡る二千二百人餘、之を歐洲諸國に比較するに、佛蘭西、埃太利、匈加利、伊太利等は一方里一千人乃至一千四百五百人に

遠征なる哉



遠征なる説

して、西班牙の如きは一方里僅に五六人を有するに過ぎず、英國、サクソン、和蘭等は、一方里二千五六百人より三千人以上に達して我密度に過ぐるも、我國に於ても神奈川、福岡等の五六縣は、既に一方里三千五六百人乃至四千人以上の多きに達しあり、土地に割合せて人口の多き、確に世界列國の間に一二の地位を保つ、生産限りありて衣食を需むる者限りなく、年又年空手坐食の徒次第に増加し、從て窮乏饑寒を訴ふるもの漸く多く、一朝天變地異ありて米價暴騰すれば、生活圏外に追出さるゝ者幾何なるを知らず、今に於て、勞働の需用多く資本の利益豊かなる海外に移住殖民をなすは、獨り内溢るゝ許りの人口に流路を興へて、行く者と止まる者とを併せ利す、即ち我が國人一般をして生活の安穩を得せしむるのみならず、又外諸外國人と競争して、幾多の小日本を地球表面に建設し、我が利益の區域を擴大して、優存劣滅の時世に應ずるの長

遠征なる説

計大策なりと言ふ位は、識者夙に之を稱道し、國人又既に之を知る、我輩は之を繰返へす迂遠を學ばざる可しと雖も、識者の夙に稱道し國人の既に知る此の長計大策にして、實際に至ては壯快活潑に行はれざるのみか、誠に寂々寥寥、唯々先年來布哇に數千人の出稼あり、近頃ニュージーランドに數百の勞働者を送りたる外、別に聞く所ならず、北米の太平洋地方に在る數千の國人の如きは、概ね不生産的書生の徒、移住殖民の上にて固より言ふに足らず、遠征の必要は國人の智識となり感情となり希望となり光明となりて、而して遠征の盛に行はれざる所以の者は、先づ大に探檢的遠征を試みざる故なりと斷言せざる可からず、コロンブスの名譽は何故に輝くか、マゼランの事業は何故に青史に存するか、カピテン、クックは何故にサンドウツチ土蠻の毒手に斃れたるか、サー、ジョン、フランクリンは何故に豪骨を北極の氷雪に暴らしたるか



リヴィングストンは何故に亞非利加の暗陸に猛獸毒蛇と闘ひたるか、スタンレーは何故に近時歐米諸國民の崇敬を買ひたるか、是れ皆な一身を挺出して怒濤狂瀾を破り、暗風黒雨を冒し、危峯險河を越え、萬死の途に出入して未知不識の地方に探檢的遠征を試みたるに因るにあらざるはなし、探檢的遠征を以て其の國人の移住、殖民、新建國の先驅をなし、國人を利し且つ世界に新智識を與へたるに因るにあらざるはなし、探檢的遠征は諸般遠征の先鋒なり、貿易、移住、殖民、新建國、新文明を開くの鍵なり、之に依らずんば到る處の地理、氣候、地質、人口、種族、宗教、政治、物産、商業等の如何を知る能はず、之を知る能はずんば何程冒險の氣象に富める國人と雖も、志を決して父祖墳墓の故國を去りて移住、殖民の遠征をなす能はず、北米洲に於けるアングロ、サクソン民族の殖民地も、其の創業に當ては幾十年の星霜と數百千人の探檢を費や

したるの事實を知る者は、明に探檢的遠征の移住、殖民の事實に先て欠く可からざるを知らん、

二十餘年來、西洋の智識は潮の如く我が社會に注流し來り、親しく歐雲米雨の旅行をなしたる者幾百千人ぞ、蟹行の文字を朗誦して世界の形勢に通曉したりと稱する者幾百萬人ぞ、政論之が爲めに新に、文學之が爲めに、蒸氣力、電氣力之が爲めに用ゐらる、誠に光彩燦爛の時代と評す可きか、然れども汝が北門の鎖鑰なりと稱する北海道を跋渉し、更にサガレン島又は千島諸島に至り、オコツク海を渡りてカムチツカを見、更に船を進めて世界大漁場の一と稱せらるるベーリング海峡邊の形勢を視察したる者幾人かある、汝は口癖の如く露國圖南の雄志を稱し、サイベリヤ横截鐵道の計畫に驚く、然れども一衣帶水の日本海を航して亞細大陸の地を踏み、黒龍江を渡り、ヤプロノイ山を越へ、バイカル湖



遠征なる説

邊を過ぎ、イルクツク、トムスク、チューメンを経て、ウラル山の南方に到り、進んで歐洲露西亞の南部及び其近傍諸國を視、更に路を轉じてカスピアン海の東岸に添ふて中央亞細亞に入り、チムケンド、タシケンド、ボハラ、コーカン、天山南北路等を経て、再びサイベリヤに出で、此の鐵道の影響する所如何に廣大にして我國人は如何の方針を以て之に應せざる可からざるかを研究せし者有りや無しや、朝鮮、支那の内部を遍歴せし者幾人かある、亞細亞南部諸國、印度、印度洋諸島を實踐せし者幾人かある、南洋群島、濠洲を探檢せし者幾人かある、況んや亞非利加をや、南亞米利加をや、汝は龍動の月、巴里の花を賞するを知りて、而して以上に列擧したる地方の地理書を通誦したることも有りや否や疑はしきなり、我が國人が今日眼前の文明國を學ぶを知りて、而して他日の文明國即ち幾多小日本を建設す可き地方の事情を拋棄すること此の如

し、北海道の移住すらも、天涯千萬里地獄に行くか如き感想を有し居るは北海道の探檢すらも盛に行はれざるの証據なり、海外移住殖民の殆んゞ空論に止まりて速に實行する能はざるは、探檢的遠征を懈りて行先の事情を知らざるに因るもの多々、

歐米諸國民の如きは、探檢的遠征に熱心なること火の如く、無數の探檢者は協會の派遣する所となり、政府の保護する所となり、帝王の優待する所となる、殖民政略の活潑敏捷なる豈に怪むに足らんや、我輩は我國人も亦最も探檢的遠征を重ずること此の如きに至らずんば、移住殖民の遠征斷じて盛に行はれざるを知る、蓋し探檢的遠征は諸般遠征の先鋒なればなり、

殖民省の新設

遠征なる説



遠征なる説

隣家の内情よりも世界の景況に詳かなりとは、北米合衆國人を評し得て痛快なるの言なり、今や日本島、前には穩波數千里の太平洋を隔て、般富豐饒なる南北兩米洲に對し、後には一水飛過すれば將來世界各民族の中心舞臺たる可き亞細亞大陸あり、右に南洋の羊毛國あれば、左には北方のラッコ海あり、遠くは歐洲列國に向ひ、ニカラカ運河、サイベリヤ大鐵道等の將に太平洋上に畫き出さんとする百條千條の通路交錯の衝に立ち、形勢雄偉氣象濶大、誠に大に爲すあるに足る、此の時に當て日本國人たるもの四圍の情勢を知ること、少なくとも國內の情勢を知るか如くならざる可からず、而して事の實際を見れば、其の世界の智識、感想に蒙昧遲鈍なること既に論ずる所の如し、從て遠征の勇氣なく、探檢行はれず、移住、出稼盛ならず、況んや殖民をや、新國をや、人種的競争をや、利益的區域の擴大をや、今日の儘に放任すれば、其の奮發興起

(〇二)

果して何の時に在るやも知らず、是れ尙は可なり、年又年溢れんとする人口と窮貧者とを如何せんとするか、歳又歳他國民に開拓占領せらるる大塊上の利益的區域を如何せんとするか、今に於て我國人をして、塾居の習癖を破り、倫安の懦氣を激し、踴躍飛動叱咤して千萬里外に遠征するの志を決せしめずんば、前途の沈淪期して待つべきなり、然らば則ち我國人を誘導して外に向はしめ、外に向ひたる國人を保護して、移住、殖民を奨励するの策如何と問ふか、我輩は殖民省新設の如きは、多きが中の一大策なりと答ふるに躊躇せざるなり、時事新報記者は近頃之に就て論じて曰く、

我輩は今日に當り政府が大に海外殖民の長計を定め國力を以て之を奨励保護し漸次に實行を收めんことを希望するものなり即ち其方法は今の内務大藏等の十省に駢立して更に殖民省と名づくる一省を設け其の遠征なる説

(一ニ)



長官は國務大臣として内閣に列せしむるか又は事務獎勵の爲め特に榮譽の地位として皇族を推して之に當らしむるなども妙なるべく何れにしても儼然たる一の政廳として十分地位権限を與へ専ら殖民の事務を管理して第一着の要は海外諸方に殖民地を探究し日本人の移住に適する土地を撰んで其政府と條約を結び夫れより實際の方法に就ては官の筋より特に規則を定めて之を保護するなり又は民間に移民會社なるものを起さしめ政府は其會社と特約して保護を與ふるなり何れにしても實際の便利に従ふて全國民の外出を獎勵保護するの政策を取ること肝要なる可し(中略)彼の北海道は内國の版圖にして所謂殖民地には非ざれども實際の實況を見れば開拓移住共に其功未だ半にも及ばず近來は追々繁昌の聞へられども是れは單に函館、小樽、室蘭等の海岸の地方か又は札幌、根室等都會の場所にして少しく内地に踏み込めば未開荒

蕪人迹稀到の地も少なからずと云ふ着手以來二十余年にして開拓の功かくの如く遅々たる所以のものは諸種の原因の中にも土地の廣さ割合には人口の少なき未開地を取扱ふに臨時變通の處分なきが故なり即ち其未開地に北海道廳を置き百般の施政をして内地と趣を同ふせしめんとし其長官の地位権限をも府縣知事に彷彿たるものとして一切の運動を自由ならしめざるが故なりと言はざるを得ず左れば殖民省の設置は單に海外殖民の一事のみならず北海道開拓の爲めにも其必要を見るものにして愈々設置の上には取敢へず北海道を其の直轄と爲し殖民地に對するの心得を以て同道一般の事をも處置する事と爲さば其成迹は今日に比して必ず見る可きある可し

殖民省の必要を感じ、其の事業を説き、且つ北海道を其の直轄と爲す可しと論ずる如きは、我輩の快よく同意する所なれども、今の十省に駢立



遠征なる説

して更に一省を新設せんとする説には異存あり、成程殖民省設置は今日の急務なり、國民は敢て其の經費の支出を拒まざるべしと雖も、我殖民省は英國の殖民省が地球上に碁布星羅する無数の殖民地を支配するが如きにあらず、支配すべき海外殖民地とても是れ無き次第なれば、先づ差當り獎勵誘掖の一事ころ其の重なる事務なれば、北海道も亦此の方針外に出でざる可し、されば其の事業も自ら英國等の殖民省と比して簡單容易なるべきが故に、更に今日不必要なりとの世論ある農商務省を廢して殖民省に合併し、殖民省をして不都合の生ぜざる限りは、農商、開拓殖民等の政務を併せ執らしめば、別に經費を要せずして其功は大ならんと信ず、我輩は國人をして遠征の氣象を起さしめ、其の移住、殖民をして活潑敏捷に行はれしめんが爲めには、殖民省新設の如き急務中の急務なりとする者なり、

### 將來の日本海

遠征的運動は一國の大事、我輩は他年一日實地の探検調査を遂げ千萬言を重ねて國民を警醒し得んことを期すと雖も、今は唯其の大要を論じて筆を止めんとするに臨み、將來の日本海に就て一言を費さる可からざるものあり、

日本の外人と交通するや、先づ西海岸の長崎に於てし、其の國を開くや、先づ太平洋海岸に於てしたるが故に、國民の眼光は其方向に注射するの習慣を生せしのみならず、世界の旅客、商品、流行、文明等は皆太平洋を越へて亞米利加より來るか、或は印度洋、支那海を経て歐羅巴より入るか、歐米との交通は此の二線路外に出でざるが故に、歐米の外に世界なしと言ふが如き感想を懐ける國民は、活眼を他方に馳せて歐米以外の

遠征なる説